

1 1
学 図 小 国 6 1 4

教育部
資料室

文 部 省 検 定 済 教 科 書
法 財 人 団 学 校 図 書 研 究 会 編 修

国 語 六 年 生

下



学 校 図 書 株 式 会 社 発 行

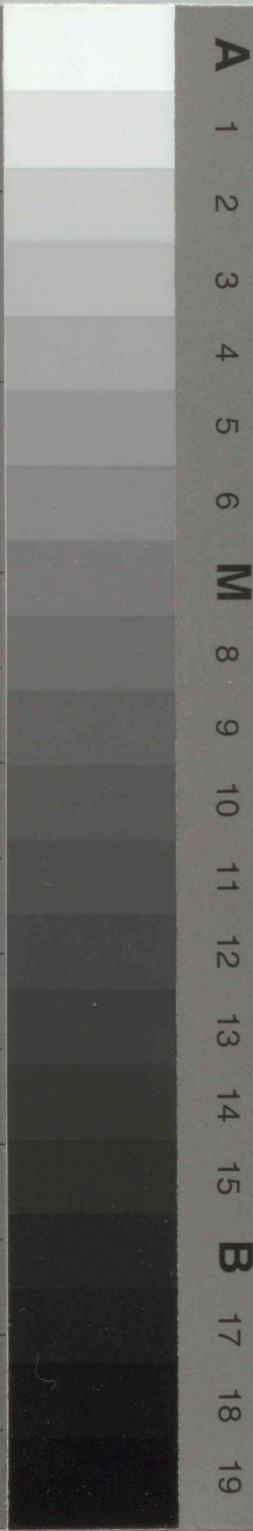
KC
G16
f2

教
3
01



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak



60389

教科書文庫

6
810
34-1950
01304 49660

225
1990



寄 贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449660

中央図書館

国
語
六
年
生
下

広島大学図書
0130449660




学校図書株式会社

広島大学図書
0130449660




目録

(一) 秋の自然

- 一 秋のうた 4
- 二 秋三題 8
- 三 あるがまま 20

(二) 心を清くする話

- 一 アフリカのえいゆう 24
- 二 いなむらの火 33
- 三 良寛さま 38
- 四 坂道 43

(三) わたくしの読書帳から

- 一 小公子を読んで 47
- 二 つばめ 50
- 三 いぬころ 53
- 四 がん 59
- 五 波にさく花 66

(四) 天気の話

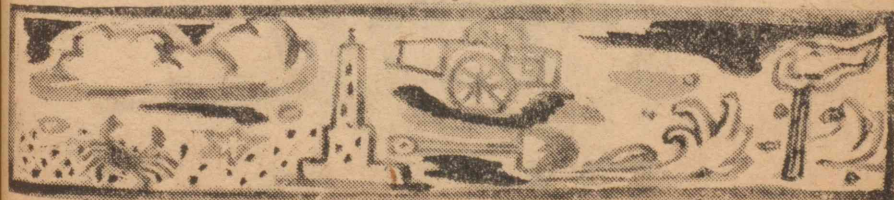
- 一 天気の話 70
- 二 飛んでいく气象台 75
- 三 雨と雲 78
- 四 雲をせめる 84
- 五 ハイトとデービスの作ったとう 87
- 六 ガラスはこの中のきり 89
- 七 雲をけむりせめにする 92

(五) 世界を結ぶもの

- 一 少年赤十字 95
- 二 国際連合の話 110

(六) 門出

- 一 文集 117
- 二 記念の木 133
- 三 新しい出発 138
- お仕事の手引 141
- 新しく出た言葉 150
- 漢字 155



(一) 秋の自然

一 秋のうた

銀河

星の光がふってくる。

さえた夜空だ、青い夜だ。

銀河が白く光って、

秋空の海を流れている。

銀河は星のむれなんだ――。

そうおそわっているけれど、

こうして見ていると、ほんとうに、



銀河は星のうずまきだ。

白い光がチラチラとかがやいて、

うずまきがはやくなったり、

そして、おそくなったりする。

銀河を見ながら歩いてみると、

ぐるぐると――

まきこまれてしまいそうだ。

銀河の下には村道が、

ほんのりと白くうかんでいて、

星のしずくがやどったのか、

草の葉が、びっしりとぬれている。



山のスロープ

いつも学校の帰り道、
きみも見ているだろう、あの山脈を。
近くに見えるようになったのは、
空気がすんでいるせいかしら。

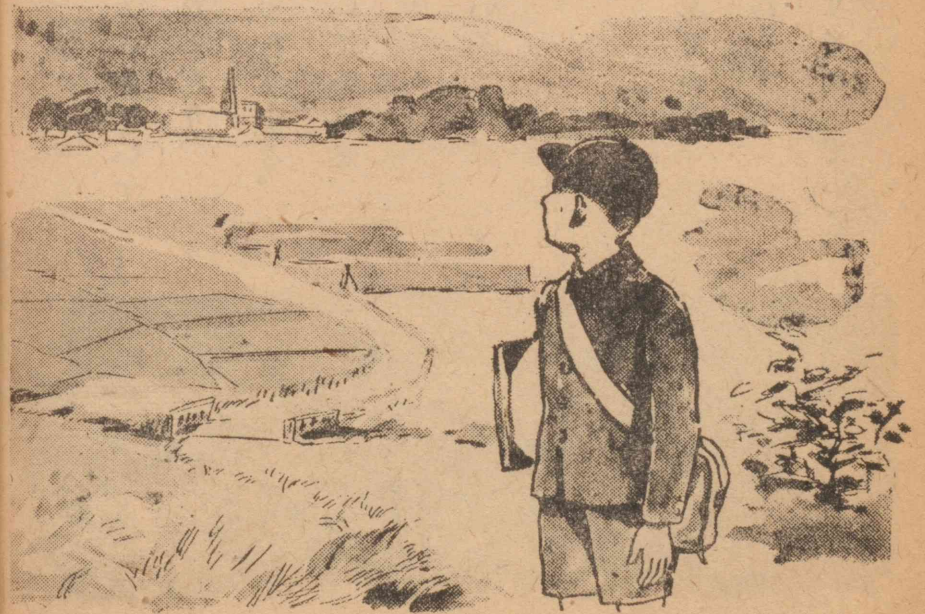
ぼんやりと見ていたあの山が、

このごろ急になつかしい。

登ったこともないけれど。

山の名前も知らないけれど。

いたadakiの右がわに、



ゆるいスロープがあるだろう。

あそこは一面の草原のよう。

あそこでひつじをたくさんかって、

牧童になりたいなどと思ったりする。

だけど、もうすぐ冬になると、

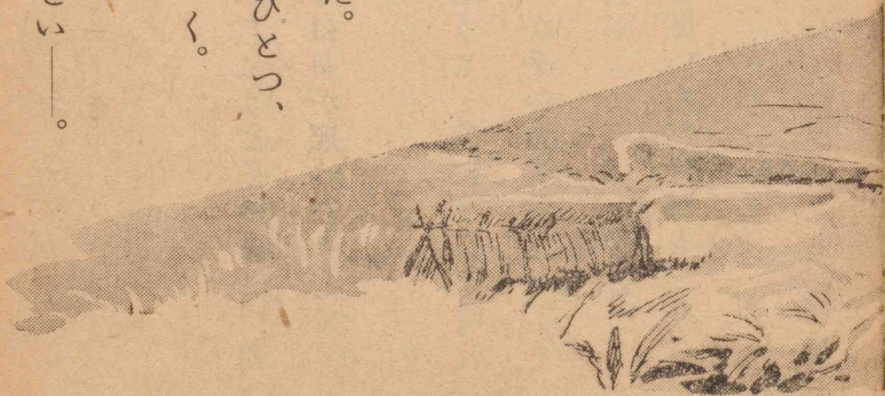
あそこも一面の雪の原だ。

スキーにいいようなスロープだ。

そら、いま綿ぎれのような雲ひとつ、

ゆっくりゆっくりすべっていく。

なんだかあの山がなつかしい——。



○ しらかばの森

ある時、わたしはしらかばの森にすわっていました。ちょうどその日は、朝から細かい雨がふっていました。ときどき間においては日が照ったりして、天気ははっきりしませんでした。

空は、しばらくやわらかな白い雲でおおわれるかと思うと、急にまた、晴れ間ができて、その晴れていく雲のあとから、きれいにかがやいた青い空が、くつきりと見えてきます。

木の葉が頭の上でかすかに音をたてました。その音を聞いただけでも、今がいつごろだということがわかりました。

それは、春の楽しいわらい声でもなければ、夏の長たらしいむだばなしでも

ありません。

やつと、聞こえるか聞こえないくらいの、静かなささやきでありました。

森のおくの方は雨にぬれて、日が照ったりかげつたりするたびに、いろいろに変わっていました。

あるしゅん間には、そこらじゅう一面にきらきら光りだして、何もかもその光の中で、ほおえんでいるかどさえ思われます。

まばらにはえた、しらかばのほっそりした幹は、急に白絹のようなやわらかい



つやをおびてきます。

地面に落ちている小さな木の葉は、むらさきがかつた金色のはん点ができて、燃えるような色になってきます。

すると、こんどはにわかには、あたりのものが何もかも、青ばんできました。ぎらぎらとかがやいていた色は、いつの間にか消えてしまつて、しらかばの木はみんな、つやを失つてしまいました。

わたしは、この不思議な色の変り方を、じつと見つめていました。

すると、森の中に細かい雨がふりだして、しらかばや落葉が、何事かささやき始めたように思われました。

すべてがひっそりと、なりを静めていました。

ただときどき、銀のすすをふるような声で、やまがらが、鳴くばかりでありました。

○ 秋の思い

すな山のかげで、日なたぼっこをしながら、本を読むというのならともかく、ぶらぶら歩くには、はまはすっかりだめになった。

まだ、それほど寒いというのではないが、どうも親しみがうすくなった。そして、家のうらぐちから出て、しぜん山の方へ足が向きやすい。

一二日強い風のふいたことがあったが、それからめつきり、けやきの葉が赤くなった。

こうようしたといたいが、全く赤黒くちぢかんでしまったのである。それでも、あたりの山では、この木がいちばん目だつて見える。

というのは、ほかにこうようする木がないからである。わりあいあたたかい地方はどこもそうであるらしい。

秋のよほどふけるまで、まっさおでいて、いよいよよとなると急に、赤黒くな

って、いそがしく散ってしまふ。

そのさびしいけやきの木と、まつ林の下草になっているすすきが、まず目だつて見えるばかりだが、それでも、しみじみと秋の深さは感じられる。

晴ればなおさら、くもつてもふつても、このごろの山はなつかしい。山といつても、この辺の山はおかの続いたのにすぎないけれど、土地におればやはり、山らしい思いがする。

わずかばかりのまつ林と、すぎの林、それにちよつとした竹やぶなので、ほかはみんな耕されている。

そんな山畑に立つと、きつといっぴきか二ひきのうしを見ることができる。

ほり返された土が、冷たい風にかわいて、そこにうしの立っているのを見ると、何かなしに静かな心持になる。

ふと、深い山のことが思い出される。

大きなみねが、両側からせまった谷、それも、かわいた落葉がふかぶかと積もっている。その落葉の中に、こしをおろして、岩をつたつていく水の音でも聞いていたい。

子供のころ、よく谷間にあけびを取りにいった。つるのかけには、よくうれたあまい実がたくさんなっていた。それを取っておなかいっぱい食べる。食べあきると、こんどは石をおこして、小魚を取る。それにもあいて、ふと上の方を見あげると、みね近い中空に、昼の月がしらじらと、ういていたものだ。



こんなことを思っていたら、急にさびしくなってきた。谷を出て、道もない林の中を歩いていけると、足下から野うさぎがとびだした。

いつだったか、はまに出ていると、思いもかけぬところに、昼の月がかかっていた。その時も、長い間わすれていたふるさとのことが、思い出されたのであった。

ここには、もくせいもない。秋にこの花のないのは、なんとしてもさびしいものである。

かすかな雲が空に光っている秋晴れの真昼など、あの黒つぼくおいしげった木のまぼろしを、目の前にえがき出すことがある。

同じにおいの高い木の花で、ちんちようげは春の花、もくせいはやはり、秋の花である。

静かにそのにおいにひたっていると、久しく別れている友だちのことが、しみじみと思い出される。

またふるさとの話だが、わたしの家から少しはなれた所に、「きんなんげ」と、よびならわされた家があった。村の旧家で、まわりにめぐらされた白かべのへいを、今でも思いうかべることができる。

そこには、むかしから一本の大きな木があつて、その花がよくにおった。

庭に出た母などがまぶしげに夕日に手をかざしながら、

「そうら、きんなんげの花がにおいでた。」と、よくいったものだ。今、考えれば、それはもくせいの花であった。



○ 落葉

林の中をふく風に落葉がまっています。くりの木は、すっかりはだかになって、その黒いえだがふるえています。ぶなの木からは、はらはらと葉が落ちていきます。しらかばの木立は、金色に光って見えます。

そうして、まだその緑の葉をつけてがんばっているのは、ただ一本のかしの木だけです。

朝は冷たくなりました。するどい風が、うす雲におおわれた空をふきまわって、小さな子供たちの指先を赤くします。

ピエールたち三人のきょうだいは、落葉を拾いにきました。

落葉は、かれて命を失っても、いいにおいを放っています。それらは、めやぎのメギーや、めうしのルーセットのあたたかいねどこになるのです。

ピエールは、せなかにかごとおっています。小さなおとなといったようすで

す。弟は、ふくろを持っていきます。小さい妹は、手おし車をおして、そのあとに続いています。

三人は、坂道を走っていきました。そして、林の近くで同じ村の子供たちに出合いました。

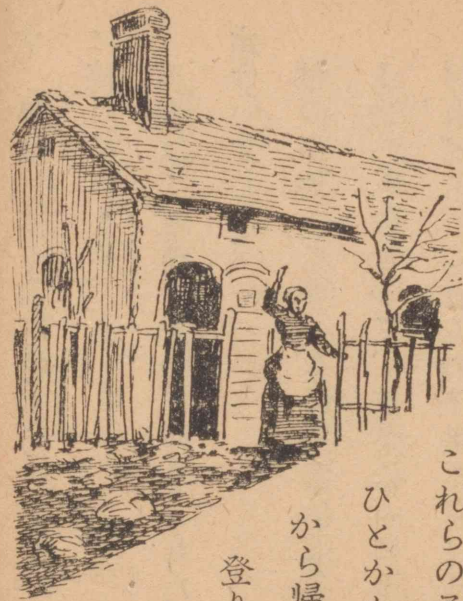
村の子供たちも、冬の用意に落葉を拾いに来たのです。

子供たちにとって、落葉拾いは遊びではありません。ひとつの仕事なのです。けれども、これらの子供たちは仕事だからといって、いやいやながらやっていると思っはいけません。仕事はまじめなものです。

今、この林の中で、子供たちは仕事をしています。男の子供たちは、だまっていっしょうけんめいです。女の子供たちは、楽しそうに話しながら、ふくろに落葉を入れています。

そうしている間にも、太陽は高くのぼって、静かに野原をあたためます。

あちらこちらの農家の屋根から、軽いけむりが立ちあがります。このけむりが、何を告げているのか、子供たちには、わかつているのです。まめを入れたスープができたことを知らせているのです。



これらの子供たちは、もう

ひとかかえの落葉を集めて

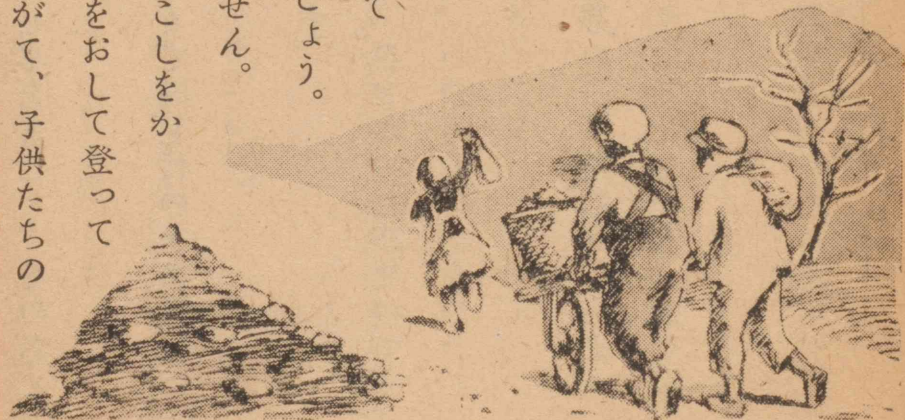
から帰るつもりなのでしよう。

登りは楽ではありません。

ふくろをおって、こしをか

がめ、手おし車をおして登って

いきます。やがて、子供たちの



からだはほてって、顔にあせがにじみます。

ピエールたち三人の兄弟は、立ち止まって休みました。

けれども、かれらはまめのスープのことを思うと、元気が出てきます。息をきらしながら、家に帰り着きました。

戸口で待っていたおかあさんは、

「さあ、さあ。みんな、パンはスープにつけてありますよ。」

と、やさしそうな目でおっしゃいます。

ピエールは、おどりあがって喜びます。小さい妹は、おかあさんにだきついて「ありがとう」をいいます。

そうして、これらの子供たちは、スープをおいしく食べるのです。

だれにとっても、働いたのちに食べるスープほど、おいしいものはありませ

○ 秋の旅

ある年の秋、芭蕉はしやうと千里ちりは、東海道を西へ西へと歩いて行きました。この道すじに、箱根山はこねがあるのです。

千里は、前々から箱根のとうげに立って見る富士山ふじさんは、たいへん美しいものだだと聞いていましたので、それを楽しみにしていました。

ふたりが、箱根の山にかかった時は、ちょうど秋の天気の変わりやすいころで、あいにくと、きりのような雨がしとしとふっていました。

「先生、せっかくこのとうげから、富士を見ようと思って来たのに、残念なことではありませんか。」

と、千里はつまらなさそうにいました。

「さあ、それがおいしいといえばおいしいようだが——まあ、この景色を見てご

らん。きりというか、雲というか、もくもくとわき出では流れている。山が見えたかと思うとかくれる。かくれたかと思うと現われる。ひろびろとかすんでいるところは海のように見える。小さい山の頭が島のようにも見える。

じつに、おもしろいではないか。晴れている時には、こんなめずらしい富士の景色は見られない。」

といて、芭蕉はその場で作ったはい句を見せました。

きりしぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

それからふたりは、大井川おおいを渡って旅を続けました。雨もすっかりあがって、秋晴れのいい天気になりました。高い木のこずえで鳴くもずの声は、ふたりの旅の心を明かるくしてくれました。

「先生、はい句は見たまま、ありのままを作ればいいのですか。」

と、千里はたずねました。すると芭蕉は、
「そうだ。ありのままを句にすればいいのだ。」
と、いって、また、はい句を見せました。

道ばたのむくげはうまにくわれけり

道ばたのむくげの花をうまが食べている。こ
んな景色は、いくども見ていることなのですが、
いつも見おとしているのです。芭蕉は、

「なんでも、そのままのすがすがしいのだ。

秋晴れには秋晴れの美しさがあり、雨の日に
は雨の美しさがあるのだ。」

と、いいました。千里は、はい句のほんとうの
作り方がわかったような気がしました。

○ 赤とんぼ

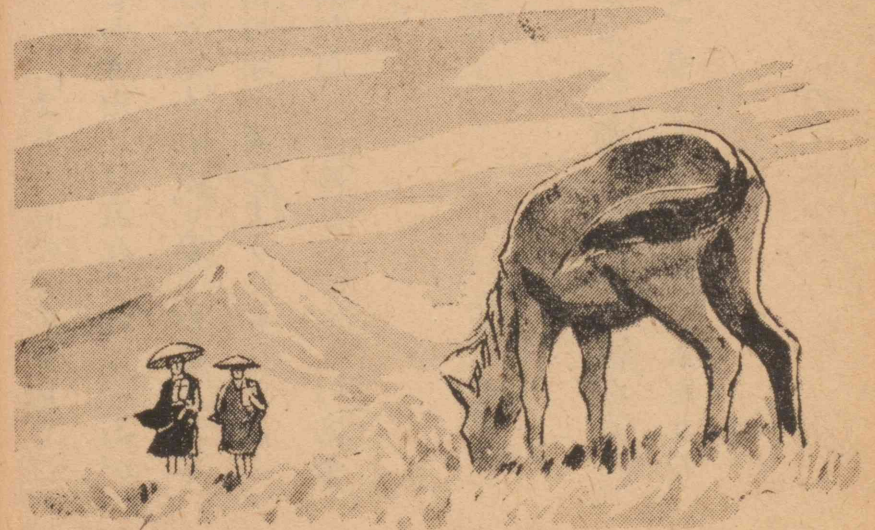
赤とんぼ風にふかれて十あまりまがきの中にうずまきをかく

さるすべりの花のいのちはいと長し秋近づきてあつさまされる

おとろえしはえのひとつが力なくしようにじにはいて日は静かなり

はたはたときびの葉なれるふる里ののきばなつかし秋風ふけば

かきの実のあかきに雨のしずくして静かなるかな日曜のひる



(二) 心を清くする話

一 アフリカのえいゆう

ボルドーというのは、フランスの大西洋岸にある都会で、ここからアフリカ行の汽船が出ます。

千九百十三年の春のことでした。このアフリカ行の汽船に、なんとなく人目をひく、中年の夫婦が乗りこんできました。アフリカ行の役人としては、おだやかすぎるし、それかといって宣教師ではなし、商人でもありません。はて何者だろうと、人々の目は、この見なれない夫婦の上に注がれていました。それはアルベルト・シユバイツェル夫妻でした。

エルザス生まれのドイツ人で、このアフリカに旅立つまでは、大学の教授であり、オルガンの名人として、有名な人でした。すべてのめいよある地位をすてて、今はただ、ふつうの医者として、アフリカに行く船に乗りこんだのでありました。

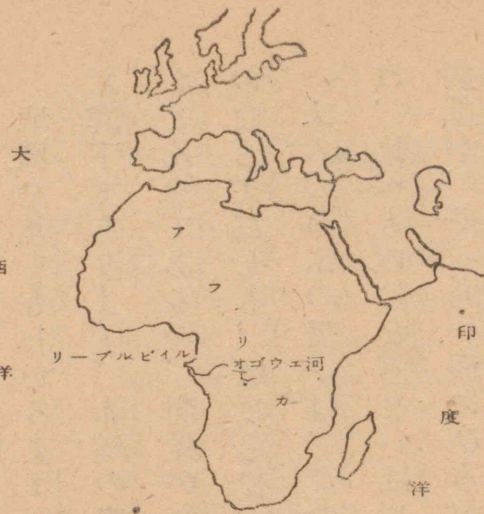
みなさんは、不思議に思うかも知れません。りっぱな大学の教授であり、有名な音楽家であつた人が、どういうわけで、医者になって、アフリカなどへ出かけるのだろうか。事情を知らぬ人は、お金をたくさんもうけるためならば、何も、このんで、遠いアフリカなどへ行かなくてもよさそうに思うでしょうし、事情を知っていても、よほど物ずきか変人のすることのように考える人もあることでしよう。

しかしシユバイツェルが、アフリカ行を決心したのは、物ずきからでもなければ、一時の気まぐれからでもありません。それは、土人たちを救い、土人たちに自分たちと同じ文明のおかけを、受けさせてやりたいという願いでした。その準備をするため、ひとかたならぬ苦勞をしました。準備というのは、医者

としてのうでをみかくことと、病院を開く資金を集めることです。とりわけ、資金を集めるためには、どれほど苦しい思いをしたか、言葉につくせないほどでした。

船は、大西洋のあら波をこえて、南へ南へと進んで行きました。尊い役目を果たすために、今、アフリカへ向かうことができたのは、この上もないうれしいことではあるが、それにしても、シュバイツェル夫妻には、去つてきたあのふるさとの景色がわすれられませんでした。ふるさとをたつたあの日、りんごの花も、ちらほらさき始めていました。かれらに乗せた汽車が動きだした時、教会のかねが鳴っていました。三月末のそよ風が、野山をなでていました。そうして、つぎつぎにまどの外に走り去つた景色が、なつかしく目にうかぶのでした。

ことによつたら、生きて再び帰ることができないかも知れないと、心ひそかにかくごを決めた旅であつただけ、今こつこくにはなれていくヨーロッパの陸地には、なごりがおしまれてなりませんでした。



アフリカの地図を見ると、大西洋岸の方は、おでこのような形をしています。このおでこを、海岸づたいに南へくだると、フランス領のコンゴ、その海岸にリーブルビルという港町があり、やはりなれてロペツみさきがあり、ここにおく地からオゴウエ川が流れこんでいます。

シュバイツェル夫妻に乗せた船は、ボルドーを出発して以来、二十日かかってやつとこのリーブルビルに着きました。ここで船をおりた夫妻は、八時間ばかりかかって、ロペツみさきにわたり、それからオゴウエ川を汽船でのぼって、ランバレーネと

いう部落に上陸しました。このランバレーネこそ、シュバイツェル夫妻が、めざして来た所であります。かれの長い間の希望は、ここを根拠として、実現されることになりました。

地図を見てもわかるように、このランバレーネのある一帯は、赤道のほとんど真下であります。赤道の真下でくらしした経験のないみなさんには、その暑さがどんなであるか、想像がつかないでしょう。それも三四か月にかぎって暑いのならまだしも、ほとんど一年中、同じ気候なのです。

土人のひふの黒さは、この気候に関係があるのでしようが、インド人などは、比べものにならないほど黒く、うるしのようです。そうして、たちの悪い病気が、そこら一面にひろがって、そのおそろしいことはお話になりません。

シュバイツェルは、自分のなすべき仕事に対する喜びと、はりあいと、責任の重大さから、「ああ、来てよかった。」と思いました。何よりもまず、病舎を建

築しなければなりません。はじめはあまり大がかりにせず、大きい家を改良して間に合わせました。いよいよ開院してから九か月の間に、二千人の黒人が薬をもらいに来ました。

手術でいちばん多いのは、ヘルニヤという大腸の病気で、これにかかると、腸が全く役に立たなくなるのです。このあたりでは、この病気にかかる者が非常に多く、そのひさんなことは、たとえようがありません。

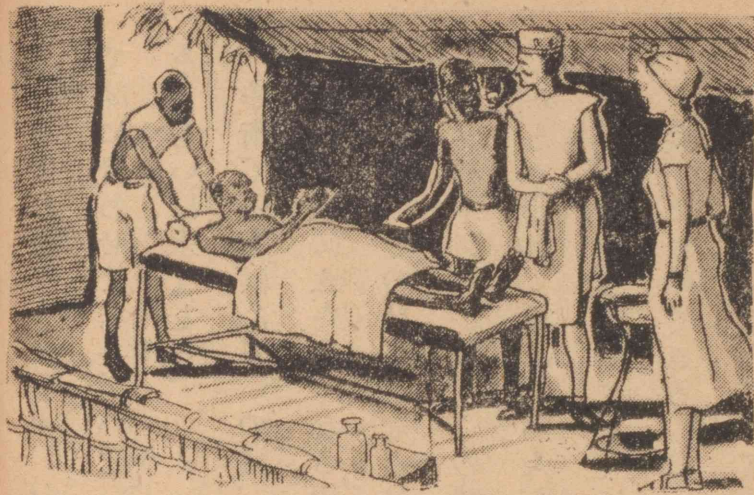
シュバイツェルは、この時のありさまを、次のように日記に書いています。「わたくしは、こんな病人が運びこまれると、その苦しそうなのにむねがつまって、口をきくことができませぬ。この近く数百マイルの間で、こんな病人を救うことのできるのは、ただわたくしひとりしかないのでした。わたくしは、どんなにほねおつても、救おうと決心し、神に助けを願いさえしました。わたくしは病人の額に手をおいて、

『決して心配するんじゃないぞ。もうしばらくしたら、おまえはねむくなる。

こんど、目がさめた時は、いたみがすっかりとれていんだ。』

と、申し聞かせました。それから妻をよび、助手に手術の準備をさせます。そして病人にますいをかけ、すばやく手術をするのです。手術がすむと、病人のそばにたたずんで、じっとその顔を見守っています。病人はだんだんますますいからさめてきますが、わたくしがそばにいるのに気がつくといつしようけんめいにさげびます。

『いたくありません。先生、わたくしは助かりました。』そして手をさしのべて、決してはなそうと



はしません。

わたくしはかんじゃたちに、自分や妻をこのランバレーネに送ってよこしたのは、神様であること、病気で苦しむみんなを助けてやるため金を出してくれるのは、ヨーロッパの人々であることを話して聞かせます。するとかれらは、『ヨーロッパの人々というのはだれか、どこに住んでいるのか、どうしてわれわれ黒人が、病気に苦しんでいるのを知っているのか。』とたずねます。わたくしは、なつとくのいくように、かれらに説明してやります。

アフリカのはげしい太陽の照っている下で、こんな問いに答えているひとときほど、わたくしにとって、喜びと感謝に満たされる時はありません。黒人たちは自分の幸福を感じ、目をうるませています。

『なんじらはみな同ほうなり』

という言葉がありますが、わたくしも黒人も、この言葉を、口先でなしに、

事実によつて感じたのでした。

シュバイツェルはこうして、少しでも黒人の生活が明かるくなるように、人間らしい生活ができ、神を敬うことを知り、感謝してこの世を見ることができるよう、力のかぎりをつくしました。

今日、ヨーロッパといわず、どんな世界のすみずみでも、かれのいたいな行いを知る人は、かれを「アフリカのえいゆう」と、よんでいます。

世の地位もめいよもなげうつて、黒人の不幸を救つたシュバイツェルこそは、じつに、その信念と信こうに生きた人といえましよう。かれの仕事を思う時、おのずから頭のさがるのをおぼえます。

二 いなむらの火

「これは、ただごとでない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地しんは、べつにはげしいというほどのものではなかった。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない無気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見おろした。村では豊年を祝うよい祭のしたくに心をとられて、さっきの地しんには、いっこう気のつかないものようである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこにすいつけられてしまった。風とは反対に、波がおきへおきへと動いて、みるみる海岸には、広いすな原や黒い岩底が現われてきた。



高台から見おろしている五兵衛の目には、それが、ありの歩みのようにもどかしく思われた。やつと二十人ほどのわか者がかけあがって来た。かれらは、すぐに火を消しにかかろうとする。

「火事だ。しろう屋さんの家だ。」
と、村のわかい者は急いで山手へかけだした。続いて、老人も女も子供もわか者のあとを追うようにかけだした。

日はすでにぼつして、あたりがだんだんうす暗くなってきた。いなむらの火は天をこがした。山寺ではこの火を見て、早がねをつきだした。

「火事だ。しろう屋さんの家だ。」

失神したように、かれはそこにつつ立ったまま、おきの方をながめていた。

五兵衛はこんなことを見たことはなかった。しかしかれは、祖父からおさなところろに聞いた、海岸の伝説を知っていた。
「たいへんだ。きつとつなみがやって来るにちがいない。」と思った。このままにしておいたら、四百の命が、村もろともひとのみにやられてしまう。もう一こくもゆうよはできない。
「よし。」とさげんで、家にかけてこんだ五兵衛は、大きなたいまつを持ってどび出して来た。そこには、取り入れるばかりになっているたくさんのいなたばが積んである。

「もったいないが、これで村中の命が救えるのだ。」

と五兵衛は、いきなりそのいなむらの一つに火を移した。風にあおられて、火の手がぱつとあがった。一つまた一つ、五兵衛はむちゆうで走った。こうして、自分の田のすべてのいなむらに火をつけてしまうと、たいまつをすててまるで

五兵衛は大声にいった。

「うっちゃっておけ。——たいへんだ。村中の人に来てもらうんだ。」

村中の人は、おいおい集まって来た。五兵衛は、あとからあとからあがって来る人々を、ひとりひとり数えた。集まって来た人々は、燃えているいなむらと五兵衛の顔とを、かわるがわる見くらべた。

その時、五兵衛はカーバいの声でさげんだ。

「見ろ。やって来たぞ。」

たそがれのうすあかりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海のはしに、細い、暗い、一すじの線が見えた。その線はみるみる太くなり、広くなった。非常な速さでおし寄せて来た。

「つなみだ。」と、だれかがさげんだ。海水が、ぜっぺきのように目の前にせまったと思うと、山がのしかかって来たような重さと、百らいのいちじに落ちた

ようなどろきとをもつて、陸にぶつつかった。人々はわれをわすれて、うしろへとびのいた。雲のように山手へとつ進してきた水けむりのほかは、いちじ、何ものも見えなかった。

人々は自分たちの村の上をあれくるつて通る、白いおそろしい波を見た。二度三度、村の上を波は進みまた退いた。

高台ではしばらくなんの話し声もなかった。村里はなくなった。田畑もなくなった。ただ、おきの方にうきしずみする、二つのわら屋根だけが見えていた。一同はただあきれて見おろしていた。

いなむらの火は、風にあおられてまた燃えあがり、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。

はじめてわれに返った村人は、この火によって救われたのだと気がつくど、無言のまま五兵衛の前にひざまずいてしまった。

三 良寛さま

すみれの花のさくころになれば、越後平野の菜の花のかなたに、かすみに包まれて形のいい国上山が、ぽつかりとういたように見られます。この国上山こそ、良寛さまが、二十年もいおりを結んでおられたところですよ。

良寛さまは、越後の国いずもぎきのたちばな屋という家に生まれました。たちばな屋は、代々名主といって、今の村長の役目をしていました。ところが、良寛さまは、子供のころはぼんやりしていたので、町の人たちは良寛さまのことを、「たちばな屋の昼あんどん」といっていました。

ある時、おとうさんが良寛さまをしかると、良寛さまはうわ目をつかつて、おとうさんをにらみました。おとうさんは、「そんな目で親をにらむと、かれないなるぞ」と、おっしゃいました。夕方になって、良寛さまのすがたが見えませんが、家中が大きなわぎをして、方々をさがしましたが見つかりません。最後に、

人々は海岸にひとりぼんやり立っている良寛さまを見つけました。

「ぼっちゃん、ここにおいでなさいましたか。」

と、みんなが大喜びで近づいて行くと、良寛さまは悲しい声で

「わたしは、まだかれいになっていないか。」

とたずねました。こんな風に良寛さまは、子供のころから、人の言葉を疑うことのできない人でした。

みなさんも、良寛さまが大きくなって、子供たちとかくれんぼうをなさった話を聞いたことがあるでしょう。

ある時、かくれんぼうをしていた子供たちは、良寛さまをわすれてしまつて、めいめいの家へ帰つてしまいました。そんなことを知らぬ良寛さまは、小屋のつみわらの中に首をつっこみ、いつまでもかくれていました。

まるいお月さまが出て、夜がふけました。百しよう家のおかみさんは、小屋



の中でがさがさ物音がするので、不思議に思つて小屋をのぞきに行きました。良寛さまが、わらの中にかくれているのを見ておどろきました。「良寛さま、そんなところにかくれて何をしていますらっしゃるの。」とたずねると、「しいつ、そんな大きな声を出すと、おにがさがしに来る。」といました。

良寛さまは、十七八才のころから、名主の見習をしてお役所勤めをしていました。しかし、勤めがうまくいかなかったのでしょう。頭をそつて、おぼうさんになりました。

そして、諸国をめぐり歩いて、修行をしました。

備中の国、玉島の円通寺のおしょうさんについて、おぼうさんのけいこをしました。円通寺にはたくさんのですが、そのなかまに、せんけいというぼうさんがいました。せんけいは、他のでしのように、議論なんかしません。いつもだまつて、畑に出では、みんなのために野菜を作っていました。なかまのぼうさんが、つぎつぎにりっぱなお寺のおしょうさんになっていくのに、せんけいだけは、いつもそまつな衣をつけて畑を作っていました。

良寛さまは、このせんけいのこと、とても感心していました。

良寛さまは、そこで二十年も修行して、ふるさとへ帰ってきました。それから国上山のいおりにいて、色のさめたそまつな衣をつけて、村の人々を教え、また子供たちの遊び相手となつてくらししました。

良寛さまにとっては、子供ほどうれしいものはありませんでした。

雪がとけて春になると、良寛さまは小さいはちとつえを持ち、ふくろの中に

おはじきと手まりを入れ、いおりを出て、里の子たちと遊びました。

この里に手まりつきつつ子供らとあそぶ春日はくれずともよし

子供たちと手まりをついて遊んでいると、良寛さまには、日のくれていくのがとてもおしかったのでした。

良寛さまは、すぐれた歌人であり、また、日本でいく人という、字のうまい人でした。

良寛さまは、はちに、わずかばかりのお米をいただいで、こじきのような生活をしていましたが、村の人々は、良寛さまを仏様のように敬いました。

四 坂 道

わたくしは、ぺこぺこになったおなかをこらえて、学校の門を出た。雨あがりのどろ道はじつに歩きにくい。一二年生のむじやきな話を聞きながら、いつものまにか坂道まで来てしまった。

坂道には、荷車を引いた年のころ四五六の男が、前へも進めず、あとへもひけずこまっていた。どろの中に車の輪がくいこんだのを、荷車ひきは、まっかになつてひっぱっている。けれども車は動こうともしない。道を行く人の中には、りっぱなしんしもあった。力の強そうな学生もあった。しかし、だれもこの車をおしてやろうとする者はなかった。

「よいしょ、こらしよ。」荷車ひきは、ひとりで元気をつけているものの、炭だわらを山のように積んでいるので、動かしかねていた。それでもどうかして荷車を、どろの中から引き出して、やっと坂の中ほどまで引きあげてきた。坂は

急になったので、車はまた動かなくなつた。

その時、一二年生の五六人がふと気がついたらしい。「やあ、あの人は苦しそ
うだね。おしてあげよう。」

ひとりのマントの生徒がいった。

「おしてあげよう。」

相談はすぐまとまつた。長いゴムぐつ
をはいた子供たちは、荷車のあとにまわ
つて手をかけた。

「やあ、ぼつちゃんありがとう。すみま
せんね。」

おじさんは、額からあせをぼとぼと流
しながら、あどをふりかえつた。その顔



は、ほんとうにうれしそうである。前で

「よいしょ。」と声をかけると、子供たちは、細い手をそろえて、

「こらしよ。」と、力を入れる。中には、やもりのように、炭だわらにからだを
くつつけている者もあった。

「や、君の耳に炭の粉がついたぜ。」

「ぼく、ついたってかまわないや。」

こんな話をしながら、一しようにけんめいでおすのであつた。

あたたかい心のいっちなよつて、車はどうとう坂の上まで来てしまった。

「どうも、ありがとうございました。」

おじさんは、ほつと安心したように車を止めて、かたわらの石にこしをおろし
た。そして、元気よく通り過ぎて行く一二年生のひとりびとりに頭をさげた。や
がてかどを右におれて行くぼつちゃんたちを、おじさんはじつと見送っていた。

(三) わたくしの読書帳から

わたくしは、読書することが大好きです。一年生の時から読んだ本をあげたら、たいへんな数にのぼりましょう。読みっぱなしにしておく、頭の中から消えやすいので、三年生の時から読書帳を作り、話のすじや感想を書くことにしました。これは、読書の結果をたしかにするだけでなく、自分の読み方、考へ方の進んだあとをながめる手がかりともなつて、役にたつように思われます。五年生の時でした。先生から、「読書は広く読むこともだいじだが、くわしく読むこともたいせつである。一さつの本をくわしく読むことは、数さつの本を浅く読むのにまさる。」と聞きました。それから、よい本をくわしく読むことにつとめていきます。

このあいだ、書き表わし方のうまい文を写してみました。写してみると、文章のすぐれたところ、作者の苦心したところなどが、はつきりしてきます。「文は目で味わうだけでなく、手で味わうものだ。」と、ある書物に書いてありましたが、なるほどと思いました。書き写すと、作文の参考になるのはいうまでもないが、自分で写したので、それに親しみができるのか、いくどもいくども読みたくなります。

わたくしの読書帳から、近ごろ読んだ小公子の感想と、書き写した五つの文をかかげてみましょう。

一 小公子を読んで

話のすじ

こうしゃく家のあととりというので、アメリカにいたセドリックは母といっしょに、イギリスに帰って行った。祖父であるこうしゃくは、たいへんなかんしゃく持で、その上がんであった。毎日、そばの者をしかりとばして、え顔ひとつ見せない。むじゃきで明かるいセドリックは、このこうし

やくによくなつた。セドリックに接している間に、こうしゃくの心持は、不思議にも変わって行った。今までにない、情深いことを行なうようになった。別の家に住まわせていた母までを、むかえ入れてくれた。セドリックの美しい性質と人がらは、まわりの人々を喜ばせるだけでなく、こうしゃく一家を幸福にさせたのである。

感想

あまりおもしろくて、終りまでひといきに読んでしまった。それほどじょうずにできている。セドリックの性質のよさ、人がらの美しさには感心してしまった。

① 思いやりの心が深くて、すべての人々にしんせつであるのには、交わる人々が、みんなひきつけられている。くだもの屋のホップスじいさん、くつみがきのジック少年、メレエの妹、みんなそうである。とりわけ、身分の上下、くらしのよしあしなどは、少しも考えない。全く、神様のような愛の心である。

この心が、あのかんしゃく持で、がんこなこうしゃくの心をやさしくし、とうとう、いい人に変わらせたのである。

② お話の中心は、セドリックがこうしゃくの家に戻ってからのことである。一日一日と、こうしゃくの心持のやわらいでいくようすが、見えるようによく書けている。そのうちに、大さわざさせたのは、こうしゃくのとおりが、別に現われた時である。だが、セドリックは、こうしゃくの家にもれんもなく、かえってそれにゆずろうとする心持になっていた。セドリックは、母といっしょにくらすことができれば、それでよいと考えていたのである。ここにも、セドリックの美しい心が現われている。

③ お金を手に入ると、自分のすきなもの、ほしいものを買おうとするのに、セドリックはみんなそれを、人のためにほどこしている。

人を信じ、人にしんせつをほどこす——愛の心は、どんな人でも動かすもの

であることを、わたくしたちに教えているように感じられる。

二 つばめ

こういうことがあった。ある歌じまんの人が、友だちの家にたずねて来て、「歌を見てくれ」といった。た
いがいこういう人の「見てくれ」。は、「教えてくれ」と
いうのではない。「おどろいてくれ、ほめてくれ」とい
うのである。その友だちは、そういう人の心持はよく
わかつている。

そこで友だちは、その歌よみもそういう人だと見て
とつたので、「まあ、散歩でもしてみよう」と、いつし
よに連れ出した。歌じまんなどを聞くより、外へ出て
雲でも見た方が、どれだけ気がせいせいするか知れな



い。どうせ時間をつぶすのならその方がよい。

その人は、道々、何かしゃべっていたが、友だちは、夕方の空や、田園の景色ばかりながめいていたのである。

まだ赤い夕焼けが、西の空に残っていた。小川にそって歩いていくと、ふとその人がしゃがんで小石を拾った。何をするかを見ると——なんとかわいらしい絵もようであろう。友だちは思わず立ち止まってしまった。

そこには、あざやかなうら白の葉の川やなぎが、水の面にゆれていた。そのたゆんでゆれているひとつのえだには、まだ小さなつばめの子が、一わとまっていた。また一わ来た。えだはいよいよゆるる。えだの先は、水へついて波を立てている。つばめの子たちは、赤いほおをそろえて、さもおそろしそうに鳴きたてる。また一わとまると、えだはいよいよゆれた。ともすると、すべり落ちそうになるので、今は必死となつてすがりついている。そのつやつやし

い黒いさけば、いたいたしげな鳴き声、それだけでもかわいいのに、また一わ、はばたいてつい近くまでやってくるが、えだの上のつばめの子は、それを見てあわてて、「いけない、いけない」と鳴く。これ以上とまっては、えだがすっかり水につかってしまうのである。

この人は、そのつばめに向かって、小石を投げようとしたのである。

友だちは、はつとしてすぐとめた。そうして、さびしい気持でほおえみながら、歩み続けた。そうして、あるところまでその人を送っていつてから、「さようなら、またおいでなさい」といつて別れた。歌はどうどう見てやらなかった。見なくても、もうどれだけの歌かわかってしまった。むろん、どれだけの歌を作る人もわかつている。なぜか。それはこのひとことで、その人の心がけがまだできていないということが、はつきりわかってしまったからである。「こころ」ができなければ歌はできない。

三 いぬころ

わたくしは元來動物ずきで、なかでもいぬは大すきだから、近所のいぬは、たいていなかよしだ。けれども、こんなかわいげな声でなくのは、一ぴきもなはずだから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。ねむられないのかえ。」

と、母がねがえりをうつてこちらを向いた。わたくしはその返事をさしおいて、「あれは、白じゃないね。もつと小さいいぬの声だねえ。どうしたんだらう。」

「すていぬさ。」

「すていぬつてなあに。」

「すていぬつて——だれかがすてたのさ。」

わたくしは、しばらく考えて、

「だれがすてたんだらう。」

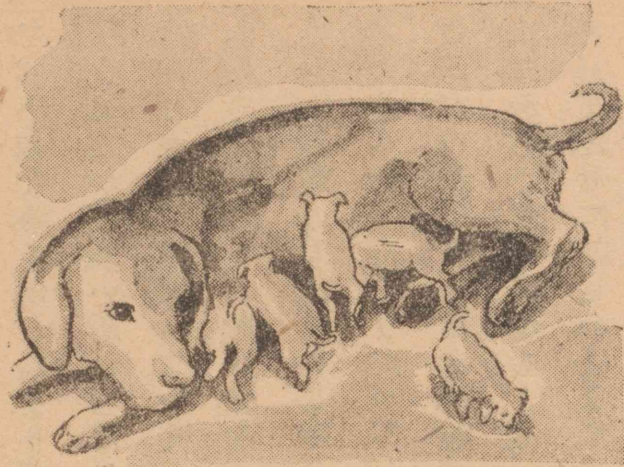
「おおかたどこかの——どこかの人さ。」

どこの人がいぬをすてたのかと、考えてみたが、わからない。

「どうしてすてたんだろう。」

「うるさいよ。」などという母ではない。どこまでも相手になって、その意味を説明してくれて、もうおそいからだまっておやすみとやさしくいって、またあちらを向いてしまった。

ねむられぬままに、わたくしは夜着の中で、今聞いた母の話をくり返しくり返し味わってみた。まずどこかのかわいいぬが、えんの下で子をうんだとする。ちっばけな、むくむくしたのがかさなり合って、首をもたげてちぶさをさがしているところへ、親いぬがよそから帰ってきて、そのかたわらにどさりと横になり、かたっばしからかかえこんで、ぺろぺろとなめると、小さいから舌の先でコロコロところがされる。ころがされては大きわぎして起きあがり、また、



よちよちとはいよって、ぽちちりと黒い鼻づらでおなかをさぐりまわり、ようやくやわらかなちくびをさぐりあて、あわててチユウとすいついて、小さな両手でもみたてもみたてすい出すと、あまいあたたかなちちがどどつと出てきて、のどへ流れこみ、むねをさがってなんともいえずおいしい。と、わきの下からまだちくびにありつかぬ兄弟が、鼻づらでわりこんでくる。とられまいとして、うぶ毛のはえたうでをつっぱり、大きわぎをやってみるが、とうとうとられてしまい、また、そこらをたずねてほかのちちにすいつく。そのうちに、おなかも太くなり、親のはだでからだもあたたまって、どろけそうないい心持になり、ついとろとろすると、ふくんだちくびがぬけそ

うになる。ゆめごこちにもあわてて、またすいついてひとしきりすいたてるが、じきにまたねむって、ちくびがついに口をぬける。ぬけても知らずに口をあいて、小さな舌を出したなりでいっこうに正体がない。

なんだか、高い所から落とされた気がした。うろうろしてそこらを見まわすけれども、さびしいまつ暗い所でだれもいない。ぼんやりしていると、雨に打たれておそろしく寒くなる。よちよちとはい出し、雨の夜中をただひとり、あたたかな親のちぶさをしたって、なきまわる声がさつき一度門前へ来て、またどこかへ行ったようだったが、それがいつかもどつて来て、どこをどうもぐりこんだのか、今はなき声がげんかん先に聞こえる。

「おかあさん、おかあさん。門の中へはいったようだよ。」
と、また母に話しかけると、母は気のなさそうな声で、

「そうだね。」

「出てみようか。」

「出てみないでもいいよ。寒いじゃないかね。」

「だってえ—— あら、あんなにないてる——」。

わたくしは、すつくと起きあがったが、なんだかひとりではこわいような気がして、

「おかあさん、行ってみよう。」

「ほんとうに、しようがない子だねえ。」

母もしぶしぶ起きあがった。わたくしもそのあとについてげんかんに出た。

そこに、生まれてからまだ一か月もたたない、むくむくとふとつた、赤ちゃけたいぬの子が、小指ほどのしつぽをちぎれるようにふって、こちらを見あげている形は、わたくしがねていて想像したよりも大きかったが、はたして全身

雨にぬれてどろだらけになり、だらりとたれたわりあい大きい耳から、しずくをたらしつ、二つの目を青貝のようにならべて光らせている。

「おやおや、まあ、かわいらしい——。」と、母もいった。いぬずきのわたくしは、じつとして見てはいられない。母のそでの下から首を出してよんでみると、それほどおそれるようすもなく、ちよこちよこどそばへやってきた。

頭をなでてやるわたくしの手を、下からぐいぐいおしあげるようにして、ぺろぺろとなめまわし、しきりにまるい前足をあげて、ばたばたやっていたが、はては、いたまぬぐらゐに小指をかむ。

わたくしは、かわいくてかわいくてたまらない。

かけ茶わんに、ごはんをもつて食べさせた。

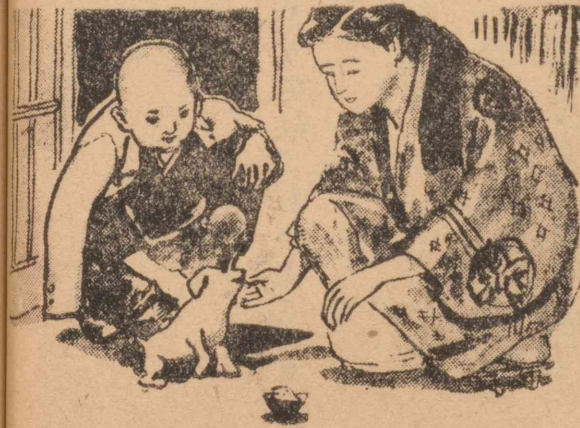
四 がん

今年もまた、ぼつぼつ、ぬま地にがんの来る季節となりました。

大造じいさんは、生きたどじょうを入れたどんぶりを持って、鳥小屋の方に行きました。じいさんが小屋にはいると、一わのがんがはねをばたつかせながら、じいさんにとびついてきました。

このがんは、二年前、じいさんがつりばりのけいりやくで、いけどつたものだったのです。今ではすっかり、じいさんになついています。ときどき、鳥小屋から運動のために、外に出してやるが、ひゆ、ひゆ、と口ぶえをふけば、どこにいても、じいさんの所に帰ってきて、そのかたさきにとまるほどになれています。

大造じいさんは、がんがどんぶりからえさを食べているのを、じつと見ながら、「ごとしはひとつ、これを使ってみるかな。」と、ひとりごとをいいました。



じいさんは、長い間の経験で、がんはいちばん最初に飛びたつたものあとについて飛ぶ、ということを知っていたので、このがんを手に入れた時から、ひとつ、これをおとりに使つて、残雪のなかまをとらえてやろうと考えていたのです。残雪というのは、一わのがんの名前で、左右のつばさに、一か所ずつ、まっ白なまじり毛を持っているので、りょうしななから、そうよばれていました。

さて、いよいよ残雪の一群が、ことしもやつて来たと聞いて、大造じいさんは、ぬま地へ出かけて行きました。がんたちは、昨年じいさんが小屋がけしたところから、少しはなれた地点をえげにしているようでした。そこは夏の大水で、水たまりができて、がんのえさがじゆうぶんにあるらしかつたのです。

「うまくいくぞ。」じいさんは、青くすんだ空を見あげながら、にっこりしました。その夜のうちにかいならしたがんをれいのえげに放ち、昨年たてた小屋の中にかくれて、がんの群れの来るのを待つことにしました。

東の空がまっかにもえて、朝がきました。残雪は、いつものように、群れの先頭になつて、真一文字に横ぎつてやつてきました。やがてえげにおりると、「があ、があ。」という、やかましい声で鳴き始めました。大造じいさんのむねはわくわくしてきました。

「さあ、きょうこそ、あの残雪めに、ひとあわふかせてやるぞ。」くちびるを二三回、静かにぬらしました。そしてあのおとりを飛びたさせるために、口ぶえをふこうと、くちびるをとんがらせました。と、その時、ものすごいはね音とともに、がんの群れがいちどにばたばたと飛びたちました。

「どうしたことだ。」じいさんは、小屋の外に、はい出してみました。がんの群れをめぐけて、白い雲のあたりから、何か一直線に落ちてきました。はやぶさだ。がんの群れは、残雪にみちびかれて、じつにすばやい動作で、は

やぶさの目をくらませながら、飛び去っていきます。

「あつ」。一わ飛びおくれたのがいます。大造じいさんのおとりのがんです。長い間かいならされていたので、飛ぶことがいくらか、にぶくなっていたのでした。はやぶさはその一わを見のがしませんでした。

じいさんは、ぴゅ、ぴゅ、と、口ぶえをふきました。かいぬしのよび声を聞き分けたとみえて、がんはこっちへ方向を変えました。

はやぶさは、その道をさえぎってひとけりけりました。

ぱつと、白いはねがあかつきの空に光って散りました。がんのからだは、なめにかたむきました。もうひとけりと、はやぶさがこうげきのしせいをとつた時、さつと、大きなかけが空を横ぎりました。

残雪です。残雪の目には、人間もはやぶさもありませんでした。ただ救わねばならぬなかまのすがたがあるだけでした。

いきなり敵にぶつつかっていきました。そして、

大きなはねで力いっぱい相手をなぐりつけました。

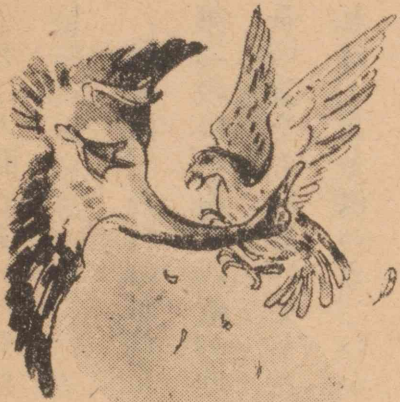
不意を打たれて、さすがのはやぶさも、空中でふらふらとよろめきました。が、さつとしせいをととのえると、残雪のむなもとに飛びこみました。

「ぱつ」。

「ぱつ」。

はねが白い花べんのように、すんだ空に飛び散りました。そのまま、はやぶさと残雪はもつれあって、ぬま地に落ちていきました。

大造じいさんはかけつけました。二わの鳥は、なおも地上ではげしく戦っていましたが、はや



ぶさは人間のすがたを見ると、急に戦いをやめて、よろめきながら飛び去りました。

残雪は、むねのあたりをくれないにそめて、ぐったりしていました。しかし第二のおそろしい敵が近づいたのを知ると、残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首をもちあげました。そして、じいさんを正面からにらみつけました。それは、鳥とはいえ、いかにもかしららしい、どうどうたる態度でした。

大造じいさんが手をのばしても、残雪はもうじたばたさわぎませんでした。最後の時を感じて、せめてがんのかしらとしてのいげんをきずつけまいと、努力しているようでもありました。

大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対しているような気がしませんでした。

残雪は大造じいさんのおりの中で、ひと冬をこしました。春になると、むねのきずもなおり、体力ももとのようになりました。

ある晴れた春の朝でした。じいさんは、おりのふたをいっばいにかけてやりました。残雪は、あの長い首をかたむけて、とつぜんひろがった世界におどろいたようでありました。が、「ばしっ」。こころよいはね音をたてて、一直線に空に飛びあがりました。

らんまんとさいたすももの花が、そのはねにふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。

「おい。がんのえいゆうよ。おれはひきょうなことはしないぞ。ことしの冬もなかまをつれてぬま地にやってこいよ。そして、どうどうと戦おうじゃないか。」大造じいさんは、花の下に立って、こう、がんによびかけました。そうして、残雪が北へ北へと飛び去って行くのを、いつまでもいつまでも見守っていました。

五 波にさく花

セイロン島を出た船は、印度洋を南へ南へとくだって、赤道をこえ、アフリカの南のはし、喜望峰きぼうぼくへ向かったのです。

地図を開いてごらん下さい。セイロン島から喜望峰まではずいぶん長い間です。船はちようど十七八昼夜、山も陸地も見えず、ただ水の上を走って行きます。ところが、船が赤道をこえる前後に、無風帯といって、年中風の少しもないところがあります。そこへ船がはいると、それこそ海は鏡のように平らかで、どっちを見てもさざなみひとつ起こりません。ただ、船足にくだける波が、深いねむりからさめておどろくように、少しさわぐだけです。

まっさおな水、目がくらむような日の光、空には一ぺんの雲もなく、水平線がまんまるく四方をとりかこんで、そのまん中を、わたくしたちの船が走っています。

船から立ちあがるけむりは、じつにまっすぐで、少しの乱れも見せません。太陽は、ほばしらの真上から照りつけて、明かるい光が、ちようど鏡ばりの室の中にも身を入れたように、四方に照りわたってさわやかな気持です。

広い広い大洋の中に、生きて動いているものは、ただわたくしたちの船ばかりで、聞こえるものは、船のスクリューの音よりほか何もありません。ちようど、静かなねむりの国を旅行しているようなものです。

こんな時、波の上を、不意に飛んで行くものがあります。なんてしょう。

銀色をした小さな魚が、列をつくって波の上を飛んで行きます。小鳥ぐらいの大きさに見えますが、実際はそれより大きいにちがいありません。それはとびうおです。



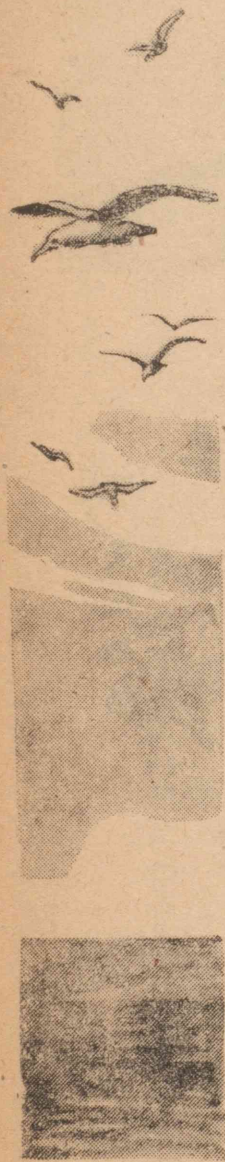
油のようによんだ青い深い海、その中に安らかにねむっていたとびうおが、スクリュウの音に目をさまして飛び立ったものでありましょう。一列になって、十も二十も飛んで行くのがあるかと思うと、横にならんで競争するように、あとからあとからと、波の中から飛び出すのもあります。これが銀色にきらきら光って、まぶしいくらいです。そして、しばらく波の上を飛んで行つたかと思うと、すつと音もたてないで、また波の中へしずんでしまいます。

みなさんは、広い秋の野に出て、ところどころにさいている草花が、風にゆれて、何かうなずき合っているようなすがたを見たことがあります。これらのとびうおは、ちょうどその草花のようです。広い広い水の野原の中で、ときどき波から出ては花のように群れ合つて、光を照り返しているかと思うと、それがまた青い水の中へすがたをかくしてしまふのです。

これが波にさく花です。そしてこれこそは、この無風帯におけるただひとつの生きたもののすがたです。

船がこの無風帯を出ると、波はそろそろ高くなつてきます。今まですべるようにしていた大きな船体がゆれ始めます。波の大きな頭が、遠くからまっさおになつてやってくるので、いつの間にかその頭を船の底へ入れて、船を持ちあげます。船は思はず前後によろめいて、船底のスクリュウは、苦しそうに音をたてて回転します。

けれどもこれくらいは、まだなんでもありません。しだいしだいに日を重ねて、アフリカの岸近く寄つて行くと、しおの流れが急になつて、ゆれることはいつそうはげしくなります。そうすると、どこからきたのか知れないが、まっ白な大きなあほうどりや、船の上を、また船のまわりを包んで飛ぶのです。



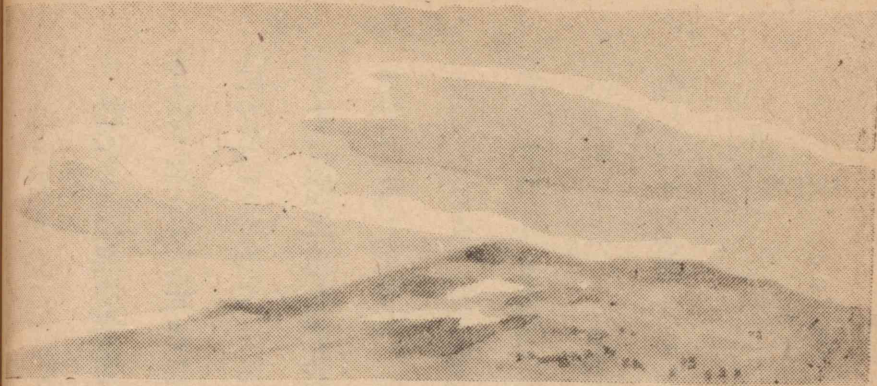
(四) 天気の話

一 天気の話

何も話のない時には、人々はどんな話をするでしょうか。天気の話です。「すばらしいお天気です。」「どうもお天気が悪くて。」「きょうはよいお天気です。」などと、天気の話をします。

となりの人たちがかいだんのところなどで出合うと、だれでも天気のことを悪くいったり、ほめたりします。お客たちが別れを告げて、げんかんであまぐつをはいている時にも、やはり天気の話をします。

しかし、天気の話というものは、もしそれがげんかん



や食事の時にされるのでなく、陸から遠く千キロメートルもはなれた船の上とか、雲の中の飛行機の内とかでされる時には、少しもおかしな話やつまらない話ではありません。そこでは、きょうはあまぐつをはいたらよいか、あまがさを持っていったのがよいかを知るために、天気の話をしているのではありません。そこでは、天気が人間の運命を決するのです。

船の周囲の空気が急にふとう明になり、望遠鏡ばかりでなく、肉眼まできかなくなつて、あたりがさっぱり見えなくなつたら、それはじつにおそろしいことではありませんか。船はちようどめくらのように、おそろおそろなんの目あてもなしに進んでいきます。進んでは、ほかの船がさけて通つてくれるようにと、きてきを鳴らします。すると、とつぜんにぶつつかり、こわれ、そして船の中に水がはいつて来ます。——しかし、いったい何につきあつたのか、だれにもはつきりとわからないのです。

船は航海に出るのをおそれ、飛行機は飛ぶのをこわがるような、そんなに深いきりがあるのです。何をいったいこわがるのでしょうか。それは小さな水のつぶなのです。きり。それは空中にうかんでいるごく小さな水のつぶの集まりではありませんか。

ただひとつの水のつぶでは少しもおそろしい物ではありません。また千個の水のつぶでもまだおそろしくはありません。しかし、わたくしたちがとても言い表わせないほどの、たくさん数が集まると、もうただの水のつぶではありません。

それは、がけの下へ汽車をひっくりかえしたり、飛行機をつばさを折ったりする敵です。

きりはときによつてはわたしどもの敵であり、雨も敵となることがあります。小さな水のつぶが集まって大きな雨のしずくとなり、なん日もなん日もふり

続くと、それはやはりおそろしいことです。かわかしてある麦のほがぬれて、くさつてきます。しかし、どうすることもできません。この水の水つぶがやってくるのをとめるものは何もないのです。つぎからつぎへと、絶間なくやってくる水の水つぶの、なすままに任せておくよりほかはないのです。

しかし、雨がちつともふらなくて、いく月も朝からばんまでむやみに太陽が照りつけるのも、なお悪いことです。ロシアのボルガ河のあたりの草原では、時にはひと夏中、少しも雨のふらないことがあります。

そんな時にいちばんくやしいことは、目にこそ見えないが、水なら、わたくしたちの周囲にいくらでもあることなのです。空気の中には、最もかわいている時でさえ、もし雨になってふりさえしたら、一町歩あたり百トンにも二百トンにもあたるほどのたくさんの水があるのです。

どこにいったいその水があるのですか。なぜそれが見えないのでしょうか。

それは空気の中にとけこんでいるからです。目に見えないのは、ちようど塩水の中では塩が見えないのと同じだからです。

人々は空をながめては、雲が出てこないかと待っています。すると時には、昼ごろにとつぜん、雲のかたまりが現われることがあるでしょう。それは水が集まって小さな水のつぶとなり、目に見えるようになったものです。

雲は長い間空にうかんでいます。

いまにも、ぽとぽとふつてきそうです。

しかし、雲はしばらく空にとまっけていても、夕方になると、まるではじめからなかったかのように、あとかたもなく消え去ります。

わたくしたちが必要な時に、この空気の中から水をしぼり取るということが、どうしてもできないものでしょうか。

地上では、水はもはや人間の思う通りになります。川もたきも、わたくしたちのために働いていてくれます。そこでこんどは、空中にある水を、人間の思う通りにするというのが問題になってくるのです。

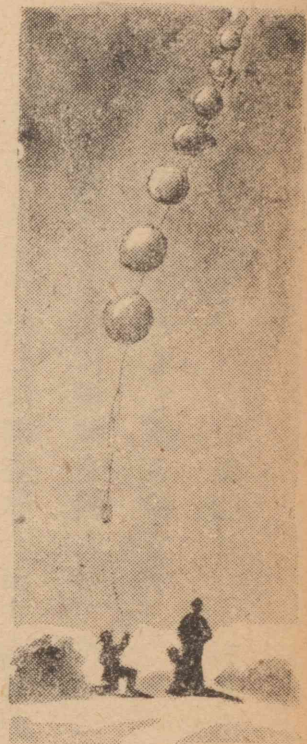
二 飛んでいく気象台

水が海から陸へ通うのには、空中を通っていきます。そのとちゆうで水をつかまえて、雨となってふるようにさせねばなりません。

しかし、そのためには、いま水はいったどこにいいのか、どのくらいの高さか、どれだけの量かを知らなければなりません。

そこで水をさがしに調査隊を出すことが必要になってきます。空へは、飛行機や軽気球で人間に機械を持たせてやることもできるし、また人をやらずに機械だけを送ることもできるのです。

そんな時には、たこや風船というおもちゃが科学のために役立つことになる



のです。機械は、はこの中に入れて、たこや風船にしばりつけることが出来るわけでしょう。

わたくしは近ごろ、空を飛んで

いく気象台を見たことがあります。それは、たぐさんの風船が、つぎつぎにいつしよにつなぎ合わされています。下の方には、はこがつりさがっています。その中には、しつ度や温度や気圧を測る機械がはいつています。それから、なおそのほかにラジオがあります。

機械のついている風船を野原へ持つていつて、そこで空へ放します。すると風船はどんどん空へあがり、だんだん小さくなって、しまいには消えて見えなくなります。

しかしその間、観測者の方は自分のつくえの前にこしをおろして、受信機を

耳にあて、たばこをくわえて、機械の知らせを書きこんでいます。かれは自分で飛んでいく必要はないのです。機械が、見たり聞いたりしたことや、測ったり発見したことを、高いところからラジオで観測者に知らせてくれるのです。

学者は地上に、機械は空にというわけです。

いつつけられた仕事が全部終ると、この飛んでいく空の気象台は地面へおりてきます。もしそれが、どこか森のしげったところや、人の通れないぬま地にも落ちこんだりすると、見つかるまでにはたいへん長い時間がかかり、そして、りっぱな機械はみんなこわれてしまいます。はこの中に残るものは、たださびた骨組だけです。

しかし、こうした空の気象台が人の住んでいる場所に落ちて、少しもこわれずに人に拾われると、人々は手の上でそれをひねくりまわして、いったいなんだろうかと知りたがります。

はこの表には、大気観測所に返していただき。あて名はどこそこですということが、わかりやすく、またはつきりと書きつけてあります。機械は、自分たちをもとの学者のところへ帰してくれとたのむわけです。そしていろいろなきごとにあつた後で、機械はまた仕事にとりかかるために家へ帰つて来るのです。

調査から帰つて来た機械は、まず第一に、

「水は地面のすぐ近くに、厚さ一キロメートル半から二キロメートルの間にあります。しかも非常にたくさんあります。もし、その水を集めて雲にして、下の方へおろしさえすれば、雨は強く長くふり続けてしょう。」と話します。

三 雨と雲

わたくしたちは雨をふらすことを知りたいと思つて居るのです。しかしその

ためには、雲を作ることを知らなければなりません。

いったい、雨とはどんなものか、またそれはどうしてふるのかということを知っている人は、どうも少ないように思われます。

もし、わたくしたちが、空気や空気の海の流れをすつかり目で見ることで、きたとしたら、どうして雲が起るかということが、非常にわかりやすくなるでしょう。

水は自分の思う通りに旅行をしているのではなくて、空気の流れが水を運ぶのです。地面の上には、非常にたくさん空気がかたまりが動きまわっていて、それがすいじょう気を運ぶのです。

あるものは陸から来るし、また他のものは海からもやって来ます。あるものは寒い国からあたたかい国の方へいくし、また他のものは、あたたかい方から寒い方へいくものもあります。その中には、水をたくさん持つて来るものもある

るし、また少ししか持つてこないものもあります。

そしてときどきこの空気の流れが出合ったり、つきあたってたりすることがあるのです。その時にもし一方があたたかい軽い流れで、他方が冷たい重い流れであったとすると、あたたかい軽い方はちょうど坂道をあがるように、かるがるとつめたい方のせなかへはいあがつてしまいます。すると空気が持つて来た水も、空気といっしょに上の方へはいあがります。

ところが、あがるにつれて、ひろがつてうすくなるので、空気が冷えます。そのために、すいじょう気は冷えて集まり、水のつぶになります。その時にわたくしたちには、空が雲におおわれたことが見えるわけです。

時にはそれが少しちがうこともあります。冷たい空気が急に、あたたかい空気の中につき進んで、さつと一気に、あたたかい空気を自分のかたの上を持ちあげてしまうのです。その時にも、すいじょう気は冷えて水のつぶになります。

それが、わたくしたちの見るかみなり雲なのです。

このようにして、雨雲はできてくるものです。雲を起こすためには、水分を持つている空気が冷やされるようにしなければなりません。ところが問題はもつともつとむずかしいのです。すいじょう気から水のつぶができるためには、何よりも、「着陸場」がいるのです。

大気の中には、電気をおびた空気のいろいろなつぶや、工場のえんとつがはき出す「すす」の小さいかたまりや、風が持つてきた海の塩のごく小さいつぶなどがはいっています。そして、水分が水のつぶになろうとする時には、ちょうどこれらのごく小さな物質の上に、水は着陸するわけなのです。もしこれらの物質がなかったり、また少なかったりすると、雲は生まれることができません。

しかし雨雲が生まれるようにするには、まだまだたくさんの方が必要で

す。新しく生まれたごく小さな水の
つぶが集まって、大きいつぶになら
なければなりません。このためには、
水のおびがたがいによつとつし合
うようにせねばならないのです。と

ところが、かれらはたがいにしよつとつし合ったとしても、水のおびが同じ電氣をおびている時には、ちよつどおはじき玉のように、たがいにはじき合うことがあるのです。そこで、結びつくためには水のおびが、反対の電氣をおびていなければならぬわけです。

雨というものは、複雑なものではありませんか。

わたくしたちは自分で雨をふらすことを研究するには、どうしたらよいのでしょうか。わたくしたちがいつでも必要な時に、雨をふらすには、どうした

らよいのでしょうか。

この大きな空氣の海を冷やすということは、まだわたくしたちの作ったれいどう機ではだめです。しかし、ときどき空氣は自然に冷たくなつたが、それでも水分はまだ雲にならないということがあります。そんな時にこそ、わたくしたちが手助けをすることができなのです。空氣中に水のおびのための着陸場ができるように、わたくしたちはちりをまき散らすことができますし、けむりをふきこむこともできるし、塩をふりまくこともできます。またわたくしたちは飛行機で空へあがつて、水のおびが必要としている電氣をおびるように、電氣をおびたすなを高いところから投げおろすこともできます。それらはみんなできることです。しかし、それらをいままでに少しでも試験をしてみたことがあるのでしょうか。



四 雲をせめる

飛行機を発明したライト兄弟のうちのひとりであるオルビル・ライトが、
「ある時、わたくしが自分のへやで仕事をしていると、飛行機の飛ぶ音が聞こえてきた。まどの方を見ると、飛行機がまっすぐに雲に向かって飛んでいくのが見えた。数秒で飛行機は雲の中に消えて、それからまた雲の反対のはしの方に現われた。機体の後には、ちようどおのうにふわふわした軽いけむりがたなびいていた。よく見ると、それは飛行機がまいているちりであるのに気がついた。その時、わたくしはこれをヨーレンが試験をしているのだということがわかった。

五度か六度か、飛行機は雲の間を通りぬけた。すると雲はしだいにうすくなって、三、四分たつとすっかり消えてしまった。となりの雲も飛行機がなん回か通りぬけると、同じようなことが起こった。そして三番目の雲はすっかりあとも残さずに二番目の雲に続いて消えていった。」
と書いています。

千九百三年にライト兄弟は世界ではじめての飛行機を造りました。それは鳥かごににているおかしなかつこうの機械で、やっと地面からはなれると、わずかに数メートルばかり高くあがっただけでした。

それから二十年たって、思いがけなくもオルビル・ライトは飛行機と雲のはじめての戦いを見た証人になったわけなのです。

オルビル・ライトが見たという戦いは、その当時の新聞に、つぎのように書いてありました。

「ヨーレンはアメリカ合衆国のある大学の教授です。かれはこの試験を、もうひとりのバンクロットという教授といっしょに行いました。

雲をせめるために、バンクロットとヨーレンとは飛行機を貸してもらいまし

た。かれらはその飛行機に、すなはち電気をおびさせることのできるしかけをしました。そして、すなをプロペラーでまき散らしたのです。

長さは数キロメートル、深さは半キロメートルもある雲を打ち破るのに、四十トンのすなでじゆうぶんでした。一分もたたないうちに、雲の中には上から下まで続いた大きなあなができました。そして、五分から十分ぐらいたつと、あなをあけられた雲はすっかり消えてしまいました。

しかも、時には飛行場のあたりに雪か雨がふってくることはありません。

五 ハイトとデービスの作ったとう

それから三年ほど過ぎた千九百二十六年に、外国の新聞に同じアメリカのロサンゼルスからの新しい知らせがありました。

こんどは飛行機の話ではなく、とうの話です。新聞には、ハイトとデービスのふたりが、雲を思うままに調節する高いとうの試験所を造った話を書いてあ

りました。とうのいちばん上の小屋の中に、特別の電気を起こす機械をしかけました。そしてこの試験所が機械を運転している時には、機械室の中にある金属のものはすべて電気をおびています。かべに打ってあるくぎにでもちよつと指でさわるとすぐ電気の火花が飛ぶといったぐ



あいにです。

ハイトとデービスの話によると、試験所が機械を運転させた時に、雲は四方からとうへおし寄せてきて、とうのてっぺんの上に集まりました。そして、ついに雨がぽとぽととふり始めたそうです。

またある時、雲が少しもないことがありました。機械を運転させると一時間半ほどの後には、空全体が雲でおおわれてしまいました。しかしかれらの実験が、真実であるかどうか、いまだにだれによつてもたしかめられもせず、認められてもいません。

なおこのほかに、アメリカやオーストラリアやヨーロッパや、方々の国々からたくさんの知らせが来ています。その中には、信用できそうなものもあるし、信用できないものもあるようです。

雨で金をもうけようと考へたひとりのずるい「雨作り師」の話も、ちよつと出てきたことがあります。かれは農夫たちと、ふつた水の量一ミリメートルについていくらというふうに代金をきめて、雨をふらすやくそくをしました。ところが幸いなことに、ちよつどその年には、雨の多い夏にめぐり合わせたので、その「雨作り師」はなんの苦勞もせず、また一銭の費用もかけずに、金をもうけたということです。

さて、みなさんどうでしょう。もはや人間は雲を思うままにして、雨をふらすことを覚えたとみてもいいのでしょうか。

いいえ、問題は、まだまだいま試験中というところなのです。

六 ガラスばこの中のきり

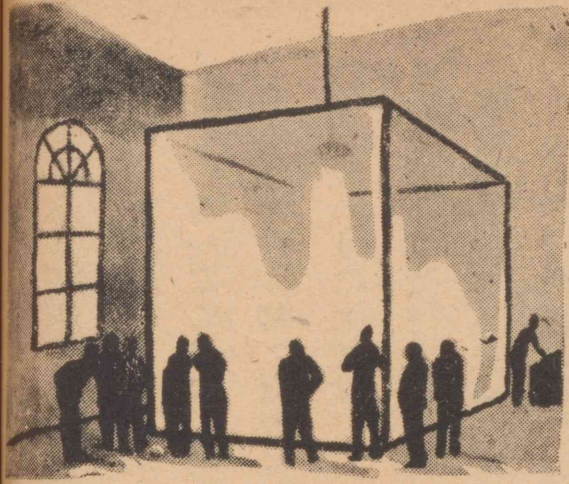
千九百三十三年の十一月、ロシアのある町の気象学研究所に、学者たちが集まりました。気象学者や、天文学者やそのほかいろいろちがった専門の学者た

ちがいたのです。

その学者たちはあちらこちらの町から、天気の話をするためにはるばると集まってきたのです。そして、みつかの間も天気のことを話し合いました。

話し合いの始まる前に、研究所の所長が学者のお客たちにいるいろいろな機械やしかけを見せました。

所長はお客たちを「きりの実験所」に案内して、周囲がガラスのかべでできている非常に大きなはこを見せました。そしてすぐにこのガラスのはこの中で、きりを起こしました。ちょうど秋の朝の川の上のように、こい白いきりが立ちこめたのです。このきりは八時間以上も消えずにそのままになっていくことができるそうです。しかし、そんなに長くはそ



のままにしておきませんでした。

所長が電気機械のスウィッチをいれたのです。電気の火花が飛びました。すると見ているお客の目の前で、三分間できりはあとかたもなく消えてしまいました。

ほかにもまだまだたくさんの機械やしかけを見せたのです。お客を広いガラスのへやへ案内して、きりの実験を見せたり、急なかいだんを通って高いところのつべんへと案内して、雲へむかって試験をしているのを見せました。

しかし、これらのことはまだほんの手をつけたばかりの試験にすぎません。自然の中には、たくさんのお客のとどされたとびらがあつて、それを開くかぎがまだ見つからないのです。かぎが見つけれらるとびらが開かれるまでには、まだなん十年もの月日を要することでしょう。

七 雲をけむりせめにする

試験はまだほかのところでも行われているのです。千九百三十一年に、ロシアの学者が、はじめ雨をふらしたり、とめたりする試験をしたことを発表しました。かれは、この試験のためにえんまくを使いました。えんまくを使って、二つの試験が行われました。

第一の試験の時には、空にはほとんど雲がありませんでした。電気をおびたけむりを空へむかつて放ちました。二時間たつと、空には黒雲がまき起こって、雨がふりだしました。そして八分間続きました。

第二の試験の時には、空はいちめん雨雲におおわれ、大雨がふっていました。そこでその雨をとめさせるといのが目あてであったのです。また前と同じようにけむりを放ちました。ただけむりにまぜるものは別のものを使いまし

た。

四十分たつと、雲の中にあながあきました。周囲は雨がふっていました。そのあなのあいた場所の下だけは雨がふりませんでした。

これはまだ千九百三十一年のことでした。しかし学者たちは結果を出すことを急ぎはしませんでした。かれらは、こういう試験のねうちを決めるのには、非常に深い考えがたいせつであるということを知っていたからです。実際、自然にふる雨と人間の力によってふらせる雨とを、どうして見分けることができるでしょうか。また雨は自然にやんだのか、あるいは人がやめさせたのかは、いったいどうして決めるのでしょうか。

結論を与えるのにはまだ早かったです。

しかし、遠いしゅうらいには、国中の水の世界がわたくしたちの思う通りになる時がやってくるでしょう。

必要な時に、また必要な場所で、思うままに雨をふらしたり、とめたりするようになり、農夫たちはひでりや不作のことは、もう永久にわすれてしまいうでしょう。

またわたくしたちは、地面の上や大地の下を流れている水の速さを速めたり、おそくしたりするだけでなく、川の世界を思う通りにして、新しいたくさんの川を作ることでしょう。

もしわたくしたちが自然を造りなおして、空中と地上と地下という水の通る三つの道のあらゆる方面で、水をすっかり思う通りにすることを知ったならば、こうしたことがみな、ほんとうに起こってくるでしょう。

(五) 世界を結ぶもの

一 少年赤十字

(一) 救われた子供

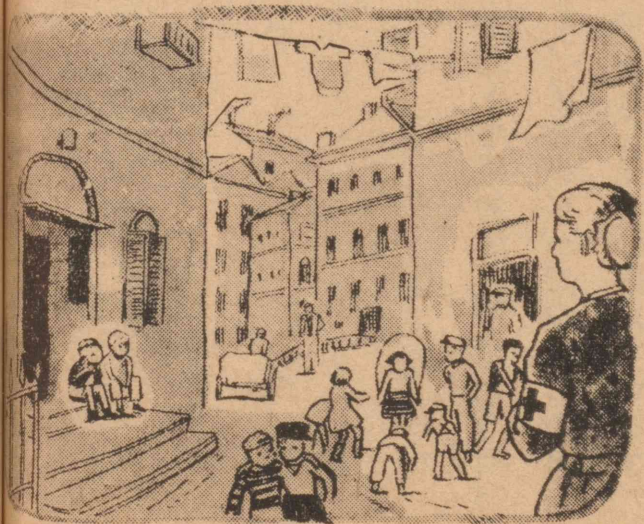
そこは、マルセイユのうら町でした。

古ぼけた、そしてまどばかり一面に口をあけた大きな建物は、町はばをせばめ、日ざしをさえぎっているのです。それでも、どこからかしのびこむ日だまりの町かどには、近くの子供たちが集まって、うれしそうに遊んでいます。かくれんぼをするもの、おにごっこをするもの、なわとびをするもの、みんな楽しそうです。じょうぶなからだの中には、きつと小さな「元気の虫」がいて、それが一秒も休まず子供たちをくすぐるので、もうじつとしていられない

のでしよう。

ところがそのそばで、いつまでもじつとそれを見ている子供がいました。それも男の子が、——そしてふたり。日もあたらな方への入口のかいだんにこしかけて——。このふたりは、顔色もほかの子供たちとうんとちがっていました。ひとめで、あの「元気の虫」が見すててしまったからただということがわかります。

ふたりは兄弟でした。兄はチャールズといつて六つ。弟はレイモンドといつて五つ。ふたりの家は、あるいなかにはありましたが、その日のくらしにこまり、運を天に任せてこのマルセーユまで流れて来たのです。



このふたりのようすを、さつきからじつと見ていた人がありました。それは、ひとりのフランス婦人で、からだには水色の服をまとい、左うでにあざやかな白地に赤の十文字をつけています。フランス赤十字の人です。

この婦人は、やがてふたりの子供に話しかけ、そのおかあさんにあつて、ふたりを赤十字の病院へ連れていきました。しんさつがすむと、医者はやさしくふたりをなだめながら、何やらおかあさんと話し合っていました。

そのあくる日のことです。赤十字の大きなバスが家の前に止まったかと思うと、きのうの女の人が出てきて、ふたりをだきあげました。ふたりはバスがめずらしいので急いで乗ってみると、ほかにもたくさん男の子や女の子が乗っていました。みんな、いつも町かどで遊んでいる子供たちとちがって、とてもおとなしいものばかりでした。

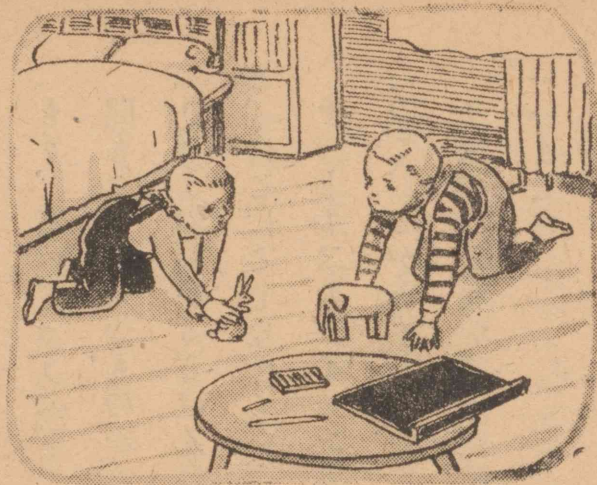
午前中バスに乗って、やっと着いた所は大きな石の家で、高いおかの上にあ

りました。それは、フランスのあるいなか町にある子供の病院なのです。

チャールスもレイモンドも知らなかったのですが、どちらも重い病気にかかっています。そして、赤十字の人がそれをなおしてくださいさるといのです。

ふたりが病院に着くとあのフランス赤十字の婦人は、今まで着ていた破れた服を、きれいなセーターに取りかえてくれました。そのセーターは、遠いアメリカにある赤十字団の子供が、外国のこまっている子供たちのために、あたたかい心をこめて編んで送ってくれたものでした。ふたりはそんなことは知りませんでした。たとえば、その話を聞かされたところで、ふたりはまだ小さくて、よくわからなかったでしょう。

その上、チャールスのセーターのポケットには、フェルトで作ったぞうが、レイモンドのには、タオルでこしらえた大きなうさぎがはいつていました。これもアメリカの赤十字団の子供たちが作ったものを、おとなの赤十字にたのん



で、海をこえた知らない国の子供たちへ送って来たものです。

ふたりは、ここへ来てから三週間というものは、全くほかの子供たちからかくりされ、別のへやでふたりきりでくらさなければなりません。

はじめはさびしくて、いやになったこともありましたが、しかし、そのたびにこのぞうとうさぎがふたりにとって、だいじな友だちとなりました。

それは、もうただのおもちゃではありません。海の向こうの、それもただかわからないアメリカ赤十字団員のあたたかい心が、そのまま生きて動いているのです。

かん護婦がひとり、毎日食事を持って来てはくれますが、たいていはふたり

きりで遊ぶのです。医者はこの三週間に、三度みに来ました。その時体重も量りました。最後に来た時、はかりをよく見てからにっこりわらって、チャールスのかたをたたいていいました。

「もう、だいじょうぶ。」

間もなく、いつものかん護婦が来て、

「きょうのおひるごはんは、みなさんといっしょよ。」と、にこにこしながらいいました。

チャールスもレイモンドも、久しぶりでほかの子供たちのなかま入りができたので、心がわくわくして、食べるのもわすれてしまうほどでした。

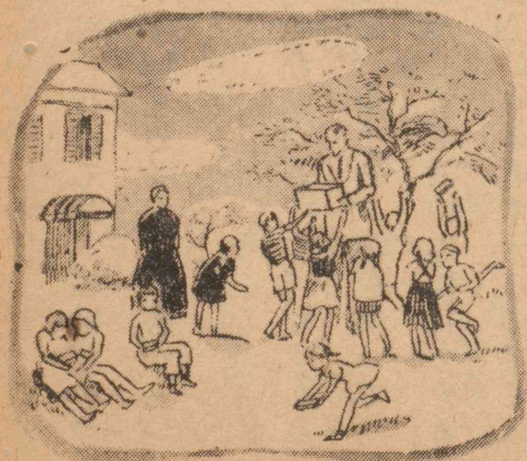
午後のひるねがすんだ時、かん護婦が、こんどは「お庭にいつてごらん。」といいました。

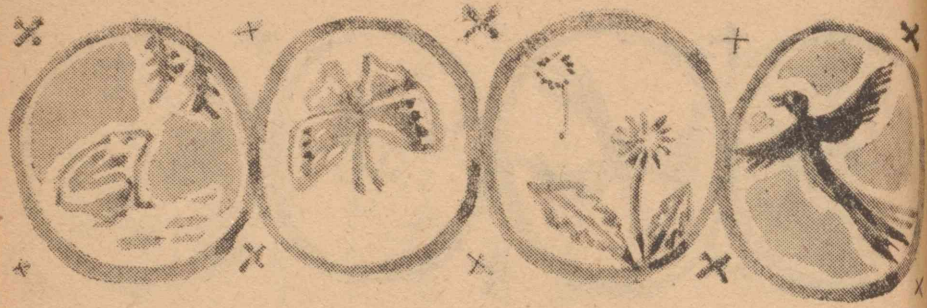
お庭では、みんなりんごの木の下に集まって、大きわざをしていました。ア

メリカの少年赤十字団から届いたギフト・ボックスを、これから先生が分けてくださるといふのです。

細長い、同じ形をした、赤十字のマークのはいつたはこには「アメリカ少年赤十字」と印刷してあります。それから、ペンでそのはこにおくりものをつめた学校の名と「ボーイ」「ガール」という文字が書いてあります。先生は、男の子には「ボーイ」と書いてあるのを、女の子には「ガール」と書いてあるのをわたしてくださいました。

みんなは大喜びです。このおくりものは、アメリカの子供たちが学校で作ったり、自分でもうけたお金で、これがいいかあれがいいかどい集め、心をこめて送って来たものです。





空は世界へ
空は世界を
みんなごらんよ
空がぼくらの
心よ心よ
花はだれにも
花はやさしく
みんなごらんよ

(二) 少年赤十字

つづいてる。
だいている。
あの空を、
わたしらの、
こども赤十字。
におってる。
におってる。
あの花を。



えんぴつ、緑の線のはいったかかわいいタオル、いいにおいのするせつけん、それから赤いくし、われないピカピカ光るかねの鏡、レイモンドのほしかったボール、「ピーツ」とふけば鳴るふえ——。いろいろの物が、つきからつきへと出てきます。

みんなは、自分のを見てしまうと、こんどは見せ合いつこです。もうりんごの木に木登りを始める子供もいます。それを見ると、レイモンドも急いで走っていきました。けれどもチャールスは、立ちあがってすぐ前の谷に目をやるのでした。もう六つなので、レイモンドよりは、少しはものを考えるのでしよう。今、先生やみんなが口々にいっていた「アメリカ」ということ、「少年赤十字」ということが、頭のどこかに残っているようで、なんだかもつとそのお話を聞きたいような気がするのでした。



花がぼくらの
すがたよすがたよ

わたしらの、
こども赤十字。

星はどこでも

光ってる。

星はなかよく

光ってる。

みんなごらんよ

あの星を。

星がぼくらの

わたしらの、

ほこりよほこりよ

こども赤十字。

旗は十字の

愛の旗。

旗はかがやく

愛の旗。

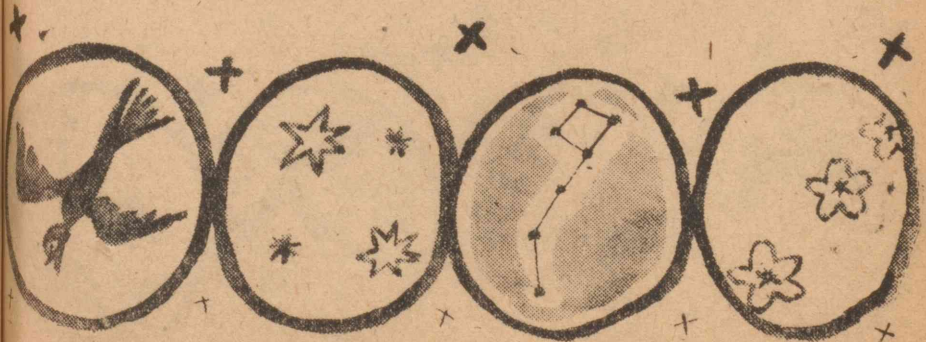
みんなごらんよ

あの旗を。

○

旗がぼくらの
しるしよしるしよ

わたしらの、
こども赤十字。



人につくす喜び。人のために何かしてあげる喜び。
それは、説明することのできない喜びです。やってみれば、人間ならだれでもわかる喜びです。そして、すればするほど、うれしさの増す喜びなのです。わたくしたちはだれでも、そしていつでも、何か人のためにしてあげることがあるはずで。人のためにつくすあたたかい心 ———— これこそ、わたくしたちの世の中で、いちばんたいせつなものですよ。
きょうしんせつをつくした自分が、あすはしんせつを受ける番がまわってこないとも限りません。きょう、病氣の人、地しんや火事にあつた人に、何か小

きなことでも自分のできることをつくします。しかし、あすは自分がそのしんせつを受ける身にならないと、だれがいえるでしょう。地しんや火事はいつ、どこで起こるかかわからないものです。そればかりでなく、戦争の時にも――。

人から受けたしんせつは、必ずしも、してくださった人に、返せるとは限りません。そんなことはどうでもいいのです。AがBにつくしたしんせつを、しばらくしてBがAに返すなら、このしんせつはふたりの間だけで終ってしまいます。AがBにしたしんせつを、Bがすなおに受け取る時、心からわき起こる感謝が、機会のありたいCに向かって返されてこそ、ひとたびせきを切ったAのしんせつは、つきからつきへとひろがって、どこまでも延びていくのです。

少年赤十字 ―― これこそこうしたことを、全世界に向かってかなでる楽器といえるでしょう。

少年赤十字団員は「ほうし」を標語としています。病気で苦しんでいる人に花やおもちやを送る、公園や道をきれいにする。そのほかいろいろな活動は、すべてこの「ほうし」の現われです。

わたくしは少年赤十字の一員として、

心身を強健にし

人のため社会のため

国家世界のためにつくすことをちかいます。

これは団員のちかひの言葉です。人のため、社会のため、世界のためにほうしするには、まず自分のからだをじょうぶにしなければ、ほんとうに働くことはできません。したがって団員は、第一に自分のからだをじょうぶにすることを心がけ、おたがい力を合わせて、健康増進に努めるのです。

赤十字の精神には、国境がありません。世界がひとつに結ばれるためには、何よりもおたがい知り合うことです。知らないことから、おそれる心が生ま

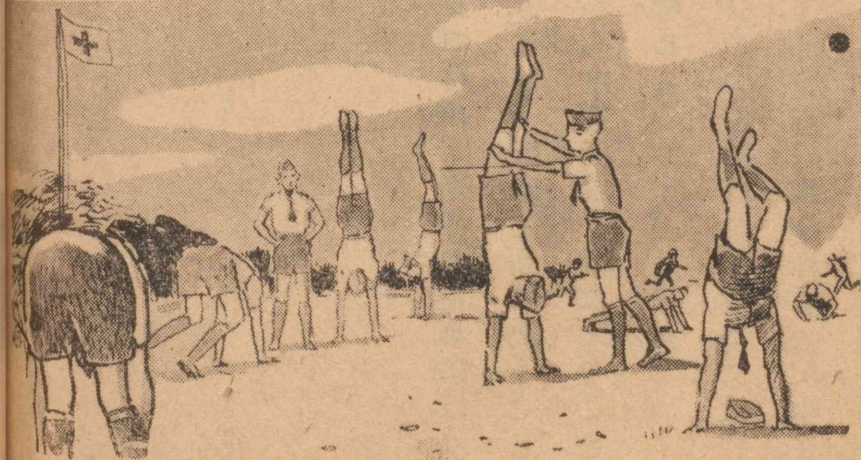
れます。ところが知り合うためには、知らせ合う機会を作らなければなりません。わたくしたちのむねにあふれるものを、出し合う機会を作るのです。名も知らない外国の団員と、絵や手紙のやりとりをする。作ったものを送り合う。これらはすべて、こうした精神の現われです。

第一次世界戦争の時、アメリカ、カナダなどの一部の子供たちが少年団をつくり、外国のこまっている子供たちに、いろいろなものを送って、赤十字の仕事を助けたのが少年赤十字の起りです。

この子供たちの真心から出た活動が人々の心

を打ち、つぎつぎと世界中の国々の子供たちの間にひろまって、今日、世界中の少年赤十字団員は、六十七か国におよんでいます。わが国も大正十一年に参加して、現在は団員二十三万をこえ、国際親善に、国際通信に、世界の友たちと結び合い、世界の平和をめざして進んでいます。

少年赤十字 —— それはりっぱにさいた、ひとつの花ではありません。ひとつの種です。芽です。これを大きくするのもからしてしまうのも、わたくしたちの心ひとつです。わたくしたちは、どんなことがあってもこの種を天まで飛ばさなければなりません。世界平和と人類の幸福のために ——。



二 国際連合の話

「おとうさん、国際連合についてお話を聞きたいのですが。」

まさお君は、夕はんのあとで、新聞を読んでいらつしやったおとうさんに第一問を發した。

「やあ、これはなかなかむずかしい問題だね。ひとつ、ちえをしぼって答えることにしよう。——ところで、国際連合のどんなことを話せばいいのかね。」

おとうさんは、ときどきまさお君のするどい質問になやまされているので、なかなかしんちようである。

「きよう、ざつしてちよつと見たのですが、国際連合はいつてきたのですか。」

「ははあ、国際連合のたんじようについてだね。ええと、千九百四十五年だから、昭和二十年だね。その六月二十六日のサンフランシスコ会議で、アメリカ、

イギリス、ソ連、中国の四大国と、参加国五十

一か国によってつくられたのだ。」

「今、国際連合にはいつている国は、どれくらいありますか。」

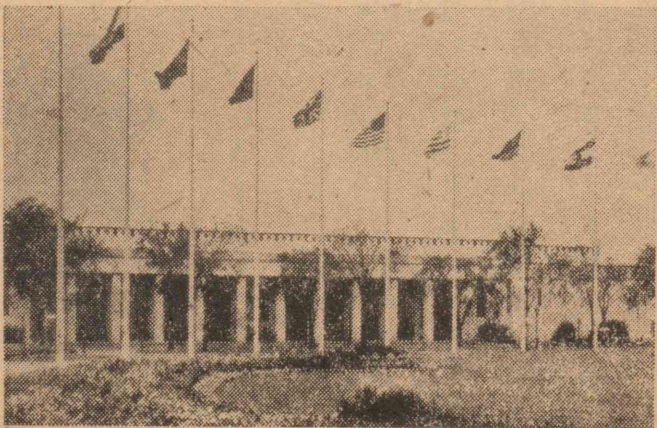
「現在では、五十八か国だ。」

「では、まだ、はいつていない国はどれくらいありますか。」

「そうだね、十六、七か国はあると思うね。」

「どんな国でも、国際連合にはいることができま

すか。」
「うん。平和を愛する国であれば、どんな国でも安全保しよう理事会のすいせんを受け、総会の決定によつては入れる規則になっているのだ。」



「すると、国際連合にはいるためには、世界の国々から『平和を愛する国だ』
ということを認めてもらうことですね。」

「そうなんだよ。」

「では、さっきおっしゃった、総会とか安全保しよう理事会とかいうのは、どんな会ですか。」

まさお君は、おとうさんのお話から問題をみつけて、すかさずたずねた。

「さつそく、おいかぶせての質問だね。では、ひとつひとつ、お話を進めていくことにしよう。」

総会は国際連合にはいつている国、これを組成国
というんだが、この組成国全体の会議で、国際連合の関係するあらゆる問題
を取りあげて討議する会なのだ。言い代えると、国際連合にはいつている国
々の幸福や、国と国とのおたがいの関係にえいきょうを与えるようなことは、
どんなことでも討議してよいのだ。」

「法律などはつくらないんですか。」

「なかなかいいところへ気がついたね。ふつう総会というと、法律でもつくる
会のように考えられるが、そうではないのだ。また、国々の自由をうばうよ
うな法律を通過させることもできないのだ。しかし、何かおもしろくない事
件が起こった場合、安全保しよう理事会に注意して、平和に解決するような
方法をすすめることはできるのだ。」

「すると、総会では解決できないんですか。」

「そうだ。たとえば、ここによくない問題が起こった場合、その国が世界の平
和を破る国であるかどうかを討議して、もしそうだという結論に達したら、
その国に対してどうするかということを決議することはできる。しかし、総
会の決議は、ただ勧告としての力しか持たないのだ。したがって、組成国の
中で、これに従わないものがあってもいいのだ。ところがこれに反して、安

全保しよう理事会の決議は、こういう場合、組成国は全部従わなければならぬことになっている。」

「その、安全保しよう理事会というのは——」。

「これは、組成国のうち十一か国でできている会で、世界のけいさつ官といえるだろう。安全保しよう理事会は、世界平和を破るおこないをおさえるために必要なことなら、どんな方法をとつてもよいという権限を持っているのだ。」

「おとうさん、このあいだラジオで聞いたのですが、きよ否権とかいうのはなんですか。」

「よく気がついたね。あれは安全保しよう理事会の五大国に与えられている権限だ。たとえば、あるおこないをしようとする時、それらの国のうち、どこか一国が不賛成なら、そのおこないはできなくなるのだ。今までにきよ否権が用いられたのは、全部で十二回あるよ。」

「どんな国々が用いたのですか。」

「十回がソ連で、あとはアメリカとイギリスが、それぞれ一回ずつだ。」

「では、おとうさん。いろいろお話を聞きましたが、国際連合といえは、世界をひとつに結んで、平和な世界をつくるために、いろいろ努力するものと思えばいいですね。」

「そうだ、国際連合は世界から戦争をなくすることをめあてとしてつくられたもので、これに参加している国は、戦争をすることを全面的に止められている。全面的にというのは、戦争をしてよい場合と、そうでない場合とに分けて、後の場合に戦争を開くことだけを止めるというのではなくて、すべての戦争を止めるという意味だ。しかし、これは自分の方から戦争をしかける場合についての話で、外国から戦争をしかけてきた時には、自衛の権利といって武器をとって立ちあがることは許されているのだ。」

お話を続けていたおとうさんは、

「やあ、だいぶ話がむずかしくなってきたようだ。

国際連合のことは、話せばまだいろいろある。

しかし、毎日の新聞やラジオには、必ず報道さ

れている。これから、そうしたことには注意して、

研究したらいいだろう。やがて日本も、参加を

許される日も来ることだろう。国際連合の一員

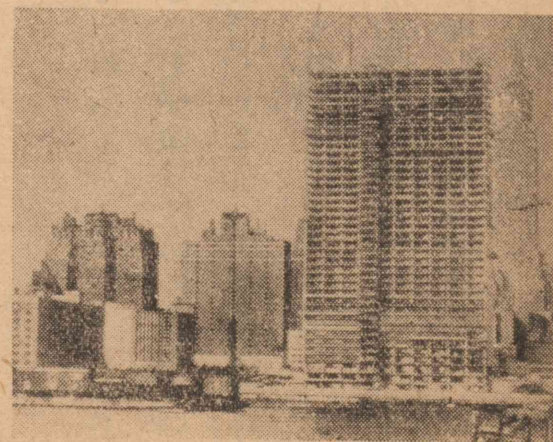
となった時には、その規則を守って国際連合が

そのめあてを果たすように努力しなければならない。そのためには、今から

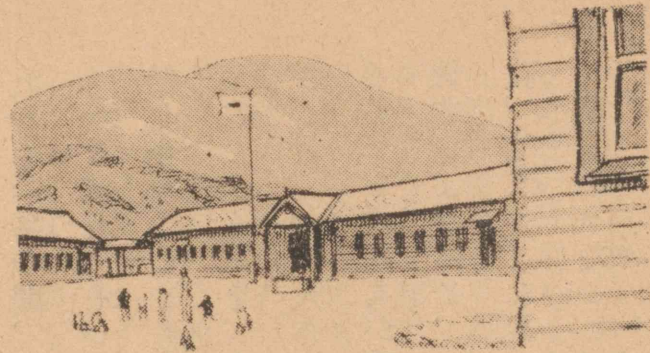
その規則をくわしく研究し、よく理解しておくことは、きわめて必要なこと

だ。

と、話をつづけた。



建築中の国際連合本部



(六) 門 出

一文 集

卒業するみなさんへ

最後の学級自治会で文集を編集することに決まったから、

何か感想を書いてほしいとのこと、みなさんといっしょに

生活してきたわたくしは、喜んで筆をとりました。

みなさん、おめでとう。

みなさんの中には、からだの弱い人もありました。少し

わがままな人もありました。考える力の足りない人もありました。けれども、

それぞれの人が、自分の力を知って努力し、また、みんなが助け合いはげまし

合って今日をむかえ、そろって卒業のできることは、なにものにも代えること

ができないほどうれいことです。

みなさん、おめでとう。わたくしは、もう一度、およろこびをいいます。わたくしがみなさんの受持になったのは、みなさんが五年生の時でした。それから二年の間、喜びも悲しみも分け合って生活してきました。ある時は、清らかな流れにそった川原に遠足に行つて、水のように美しい心であるようにと話し合つたこともありました。ある時は、高い山に登り、びつしよりとあせにぬれたからだを、すずしい風にふかれながら四方を見おろし、流れ行く雲によびかけ、心の大きい子供であるようにと話し合つたこともありました。そしてまた、お友だちが病気で学校を休んだ時には、みんなが心配し、一日も早く全快するようにと、心のこもつたみまいをしたこともありました。いま、目の前に、さまざまな思い出が、ひとつひとつはつきりとうかんできます。

悲しかったこと、うれしかったこと、楽しかったこと、過ぎ去つた思い出の

かずかずを残し、みなさんはいま、門出をむかえているのです。なんとという悲しくも楽しいことでしょう。しかし、その思い出は過ぎ去つたものとして、そのままにしておくものではありません。やがて芽ばえてくる春の野の草が、力強くのびていくように、みなさんも過去の思い出をのせて、さらに、たくましくのびてください。道は、ひろびろとどこまでも開けているのです。なんとという希望に満ちていることでしょう。

春の野山をかざる草花は、自然のままにつつましく命を延ばしています。「美しさを競うように」と、人はよく言いますが、それは、人間がかつてに言った言葉で、草花は、決して美しさを競っているではありません。すみれはすみれとしての命をだいじにしています。たんぽぽにしても同じことです。自然の



命をだいに延ばし、つつましく生きて、そこに、春の野全体の美しさが生まれているのです。

人間の世の中も、きつとそうだろうと思われれます。それぞれちがった能力を持った人々が最善をつくし、たがいに助け合ってはじめて、美しく正しい世の中が生まれてくるのです。分にもないことを考えたり、言ったりすると、世の中が乱されてきます。

わたくしは、みなさんへ「自分の力を知れ。そして努力せよ。」という最後の言葉をおくりします。自分の力をよく知ることがたいせつです。自分の力を知って、思いあがったり、なまけたりするのはつましいことではありません。自分の力に応じて最善をつくす。それが、世の中への協力になるのです。みなさんは「パスツール」のことも、「野口英世」のことも研究してきたでしょう。世にすぐれた人といわれる、それらの人々はみんな、自分の力をよく知って一生

努力を続けた人々なのです。

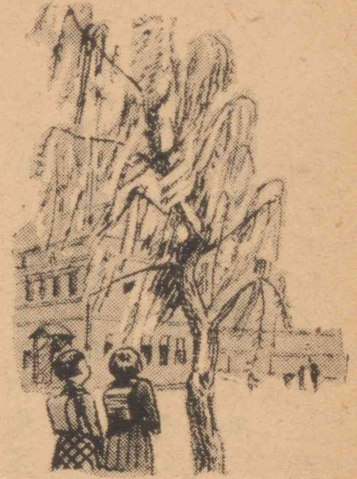
みなさん、わたくしは、みなさんがこれからたくましくのびていくことを希望し、それを信じています。

○

卒業の日が近づきました。なつかしい学校ともお別れかと思うと、なんとなく悲しい気持ちになります。

六年の間、雨の日も風の日も毎日通った学校、木のおいのする学校、きれいにそうじをされた教室、広い運動場、すいれんのさく池、みんな、なつかしい思い出になりました。わけて、運動場の大きなやなぎの木は、わたくしにとつてわすれられない思い出です。

一年生に入学する時、わたくしは、母に手を引かれて校門をくぐりました。その時いちばんに目についたのは、あのやなぎの木でした。しだれやなぎがめ



ずらしかつたのかも知れません。

だんだん学校生活になれるにつれて、やなぎの木が遊び友だちであることがわかりました。お仕事の終りのかねが鳴ると、教室から走って出て、やなぎの木の下へいったものです。かくれんぼやおにごっこをする時のめじるしにしたのです。やなぎの木を中心に輪をつくって、ゆうぎをしたこともあります。いたずらな上級生が、やなぎの木に登っていたのを見たこともあります。

学年が進んでも、運動でつかれたからだをやなぎのかげで休め、お話をしたり、歌をうたったりすることや、やなぎの木の下で写生をすることが、いちばんすきでした。教室からまどごしに、風にふかれているやなぎを見ると、なんとなくおちついた気持ちになることが、たびたびありました。

やなぎの木からいろいろなことが思い出されるいま、わたくしには、やなぎの木が遊び友だちというだけではありません。学校と深い関係をもつて考えられるようになりました。やなぎの木を見るたびに、なつかしい思い出の糸をたぐることができるのです。雨の日、しつとりとぬれているやなぎを見ても、風にふかれてゆれているやなぎを見ても、早春のころ、緑のわか芽がふき出ているのを見ても、いつも、そのときどきに応じての思い出が、なつかしくうかんでくるのです。やなぎの木が元気にのびていくように、母校がりっぱになつていくことをいのります。

○

ぼくは、六か年の間に、本をよく読む習慣ができたように思う。五年のころからは、とりわけよく読んだように。

学校文庫の本を借りたり、父に買っていたいたりして、どんどん読んでい

った。父から「そんなに読んでいると、からだを悪くするよ。」と、注意されたことがたびたびあるくらい、ぼくの読書は、父の目についていたらしい。しかし、父は、注意はしてもやはり、よい本をよく買ってくださいました。父の態度は、からだを悪くしないように、どしどし本は読むのがよいということを見せてくださっているようでもあった。

ぼくの本ばかりには、日本や外国の童話や科学物語など、たくさんの本がならんでいる。本がふえるたびに、いまままでわからなかったことがわかり、美しい人々の心にふれて自分の心がふとっていくように思えた。

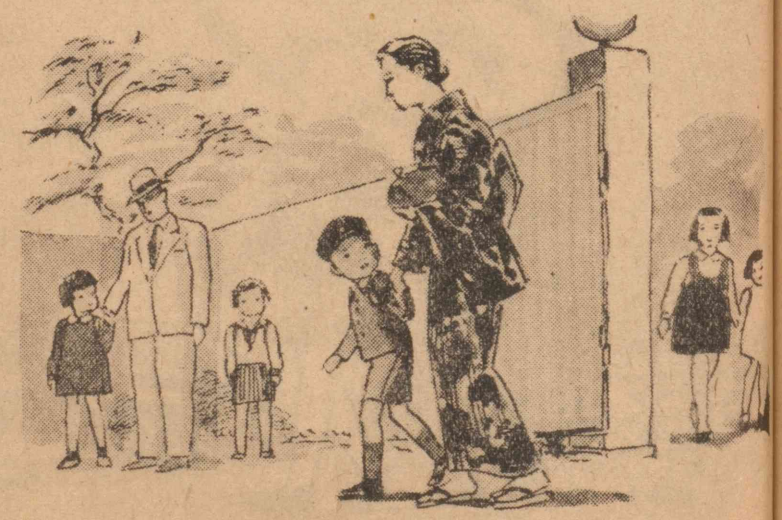
中学校にはいると、小学校よりいっそう、自分の力で研究していかねばならないと、先生から聞いた。ぼくは、この習慣をこれからもどんだんのばし、たくさんの本を読んで、自分の心をみがきたいと思っている。



六か年。
思い出はあふれる。

あの日、
さくらのふくらんだ道を急いで、
母と校門をくぐった入学のときのよろこび。
ずいぶん大きい学校だった。

遠足にいった、
先生の大きなせなかにおわれ、
うれしいような、はずかしいような気持になったあの時。



二年生の初夏だった。

雨の日、

友だちのさしだしたあまがさの、

あたたかい心にぬれた、四年生の思い出。

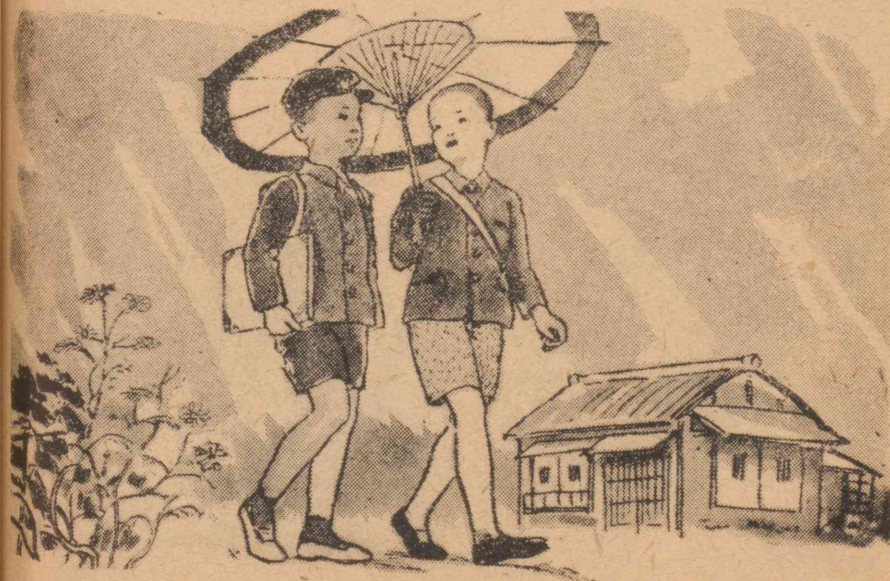
別れみちに、コスモスがゆれていた。

思い出はつきず、そして美しい。

春、夏、秋、冬。

三年、四年、五年。

六か年の思い出はあふれる。



わたくしの兄弟は、はたちになる兄だけです。兄とわたくしとの間はかなりあいているので、末子だったわたくしは、家の人にも近所の人にもかわいがられていたようです。わたくしのほしいというものは、すぐ与えられ、わたくしの食べたいというものは、すぐ用意されて、できるだけわたくしのきげんをそこねないように、あまやかされて大きくなりました。わたくしは、なんでも自分の思うとおりになるものだと思っていましたから、もし、自分の気にさわることや思いどおりにならないことがあると、すぐにはらをたてたり、おこったりしていました。

ところが、学校にはいつて多くのお友だちができる、家の中で生活していたような調子にはいかなくなりました。それでも、一年、二年、三年ごろまでは、ずいぶんわがままをしたように思います。お友だちが先生にほめられると、



ろによばれました。でも、先生からはべつにしかられるのでもなく、家のことをたずねられたり、読んでいる本のことを聞かれました。わたくしは、わざとはきはきと答えず、じっと立っていました。それから二三日たって、また、先生がおよびになりました。その時、先生は、「日記をつけているの。」とたずねられました。「いいえ。」と答えると、先生は、「ぼくは、毎日書いているよ。」

とおっしゃって、ふろしき包みをといて、なんさつものノートを取り出して見せてくださいました。パラパラとめりくながら、「日記ぐらい、自分の心を知らせてくれるものはないよ。」と、おっしゃいました。今も、あの時の先生のお顔や声はつきりとうかびます。

先生は、決しておしかりにはなりませんでしたが、

もう、それが気にさわったのです。そのころは、みんなわたくしの言うことを聞いてくれていたのです。

でも、四年生ごろになると、お友だちの態度が変わり、わたくしの友だちがだんだん少なくなってきたように思います。五年になると、それが、いつそうわたくしに感じられるようになりました。わたくしは、もちまえのわがままから、はらをたてたりふくれたりして、自分より少しでもいいことをしたり、先生にほめられたりすると、すぐ、その人を悪く言っていました。「山本さんは、とてもいじわるよ。」という声を、たびたび聞くようになったのも、そのころです。家に帰ると、わがままのできるわたくしが、学校では、思うようにならないのが、とても気にさわっていたのです。一日じゆう、だまってしまつて、わざとお友だちと口をきかないようにしたこともありました。

五年の二学期も終るころでした。ある日、わたくしひとりだけ、先生のとこ

ずいぶんよく、へいぜいのわたくしの態度を観察しておられ、なんとかして、りっぱに導いてやろうとお考えになつていたようです。わたくしは、自分の心が少しでもわかっているだけに、おしかりにならないのが、かえって、心に強くひびきました。先生のやさしいお気持が、少しはわかつたように思いました。わたくしは、それから日記を書くようになりました。そうして、自分の態度を反省するようになりました。

わたくしはいま、卒業の日をむかえて、たいへんうれしく明かるい気持でいます。

「山本さんは、作文がうまい。」と、よくほめられたことを思い出します。家でも、「ひろ子は、近ごろ考え方がりっぱになつたね。」と、父や母からほめられたことも、目の前にうかびます。

もし、わたくしが、わがままな心をおし通していたらどうでしょう。思うだけでも悲しくなります。

しかし、先生のおかげで、お友だちの中で楽しく生活ができるようになりました。わたくしにとって、先生はわすれられない方です。中学校へ進んでも、いつも、先生のお心をわすれずに、お友だちとなかよくしていきたいと思ひます。

先生、みなさん、ほんとにありがとうございました。

最後の文集に、こんなことを書いたわたくしの気持を、知っていただけたらと思ひます。

○

○ きょうのできごとを、あすまでのばすな。 フランクリン

○ 少年よ、大志をいだけ。 クラーク

○
ぼくの家は町はずれにあつて、農業をしている。父も母も、朝早くから夜おそくまで働いている。学校から帰ると、ぼくもよくてつだった。ひとあせかいて働いたあとの気持よさは、なんともいえないほどだ。父が、よく、
「作物は正直だから、手入れをしてかわいがつてやればやるほど、りっぱにできるよ。」と、話していたことを思い出す。父は、作物の心を知っていたように思われる。

ぼくは、今からからだをじょうぶにしておいて、父や母に負けぬように働きたいと思う。しつかりと大地に足をふみしめ、土のにおいや草のかおりに心をはずませて、ひとくわひとくわ打ちこんでいく。あせと土で黒くよごれたからだのにおい、思うだけでもたまらない。機械を使う。うしやうまもかう。やぎやにわとりのせわもする。新しい考え方でどしどしやっけていくんだ。

二 記念の木

ザクツと、先生がひとくわ打ちおろされたしゅんかん、先生のまわりを囲んでいた子供の中から、いつせいにはくしゅが起こつた。いつまでもなりやまなはいはくしゅは、深い思いをこめているようにさえ思えた。みんなの顔には、きん張、喜び、思いやり、それぞれの気持が現われて、朝の日の光にかがやいていた。

卒業する子供たちが、今、記念の木を植えているところである。

卒業の日が近づいて、何か学校に記念の品を残したいという希望が、だれいうとなく起こつてきた。

最後の学級自治会の時、その希望は田中君から提案された。もちろん、全部

の人が賛成した。ただ、何を、どんな方法で残すかについては、いろいろな意見が出た。

大時計とか、ラジオとか、国旗を立てる柱とか、オルガンなどいろいろな意見が発表されたが、費用がかかったり、こわれてしまったりして、いつまでも記念に残らないではないかという意見もあつて、だめになってしまった。

その時、

「木を植えよう。」と、まさお君が提案した。

「木がいいわ。今ある運動場の木も、ほんとうになつかしい思い出よ。」と、ゆきこさんが賛成した。

「費用も、あまりかからないだろう。」と、たかし君がつけ加えた。

「でも、かいたらどうする。」と、いつも同級生をわらわせるけんじ君が、また、みんなをわらわせたが、植えた木はよくつくまで世話をすると、あとは心

配ないという意見が出て、たちまち、全部の人が賛成した。先生にも相談して、いよいよ記念の木を植えることに決まった。

植木屋さんにたのんで、じょうぶでこの土地によく合う、くすの木を買ってきた。

卒業式の前の日の朝、運動場のすみを選んで植えることになったのである。

先生のあとをうけて、かわるがわるみんながくわを打ちおろし、あなをほった。くわを打ちおろすたびに、どの子供もきん張した顔つきになり、記念の木の成長をいのっているようである。

やがて、先生とまさお君との手によつて、くすのなえ木が植えられた。土をかけ、水をやつて、記念の木は、校庭のすみに根をおろした。また、はくしゆが起こつた。

前から用意してあった、「第二十五回卒業生」と、あざやかに書かれたたてふだが、そばに立てられた。すつかり終った。「ばんざい」と、大きな声を出した男の子がいる。「この木と競争だ」といった子供もいる。みんなの顔は明かるい希望にかがやいていた。

みんなの植えたくすの木は、一年、一年と成長していくでしょう。太陽の光をじゆうぶんにつけ、水分をうんとすつてぐんぐんと延びていくことでしょう。同じように、この木を植えた子どもたちも、太陽の光をあびて、のびのびと成長していくにちがいない。

なん年かの後、校庭に植えられた記念のくすの木が、緑の葉をしげらせ、無言のまま立っていても、それを植えた子供たちは、その思い出をさまざまにうかべて、母校へのなつかしさを深めることであろう。

○

われらひとしく、まなびやに、
わかれる思い 指にこめ、
植えるくすの木 記念の木、
朝日に土が ひかっていた。

卒業後にも ときおりは、
このまなびやを おとすれて、
くすのみどりを あおぎみん。
かたくちかえば むねおどる。



三 新しい出発

あけてぞ、けさは、

別れゆく。

うたいながら、思わず目がうるんできた。先生のお顔がぼうつと見える。こくばんの字が、ふたえに見えてくる。入学した時のことが、ちらつと目の前にうかんだ。

六か年の間、楽しく通ってきた学校と、いまお別れだ。やさしかった先生とも、かわいい下級生ともお別れだ。

深い思いをこめた歌声は、重くひびいていく。

長い間、かげになりひなたになつて、世話をしてくださったおとうさん、お

かあさん。

いつも、やさしく導びいてくださった先生方。

卒業式の喜びのかけに、かくれた苦勞のあることを思えば、深い感謝の心があふれてくる。

それは、「ありがとうございます」と、あつさりいきれないものがある。

ちらつと受持の先生の方を見た。

先生のお顔には、思いなしか、さびしさが現われていた。

校長先生の、

「あげひばり、空いっぱいに鳴いてみよ。」と、おっしゃった、最後の言葉が、はつきりうかんでくる。

そうだ。

これから、うんとがんばるんだ。大志をいただき、希望にもえて、空いっぴい
にないてみよう。

先生は、きつとそれを喜んでくださるでしょう。

卒業は、新しい門出だ、出発だ。道は遠い。

勇気を持って、正しく、明かるくふみ出そう。

「これで、式を終わります。」

先生の声が、ひとときわ高く思われた。

静かな、せきひとつしなない講堂に、ピアノの音がひびく。

そして、

新しい道がひらけた。

ひたむきに、走れ、走れ。

お仕事の手引

(一) 秋の自然

1 「秋のうた」は、二つの詩がのっています。
のびのびと思ったことが表わされているところ
はどこですか。

2 みなさんも秋の詩を作ってみなさい。また、
いろいろな秋の詩を集めてみましょう。

3 「秋三題」について、つぎのことを研究しま
しょう。

○「しらかばの森」の文の美しい所はどこで
すか。

また、小さい所をよく見て細かく書いてい
る所はどこですか。

言い表わし方のじょうずなところはどこで
すか。ノートに書き取ってみましょう。

○「秋の思ひ」で、作者はどんなところに秋

を感じているのですか。

どうして、「秋の思ひ」という題をつけてい
るのでしょう。

この文の美しい所はどこですか。自分のす
きなところを、書きぬいてみなさい。

○「落葉」は、秋のことを書いたのですが、
前の二つとはねらいがちがっています。

この話の気持ちのいいところはどこですか。
子供たちが、いっしょうけんめいに働いて
いるようですが、どんなに書かれていますか。

4 「あるがまま」は、はい句と和歌について書
いてあります。

「秋の旅」を読んで、つぎのことを研究しな
い。

○「ぎりしぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき」
というのは、どんなようすをうたったのでし
ょう。

○芭蕉は、はい句について千里にどんなことを、教えているのでしょうか。

○千里は、はい句をどんなものだと考えていたのですか。

5 「赤とんぼ」には、五つの和歌があります。

一つ一つの和歌について、そのようすや、場面や、感じ方などについて話し合いなさい。

6 和歌にうたわれているようすを、できるだけくわしく、ふつうの文に書いてみましょう。

7 和歌やはい句について、つぎのようなことを研究しなさい。

○いつごろから、できたものか。

○和歌とはい句は、どんなところがにている、どんなところがちがうか。

○和歌やはい句は日本で、いつごろ、さかんに作られたのだろうか。

8 みなさんも自分で、和歌やはい句を作つて

(ロ) 村の人々を集めようとした方法は？

(ハ) つなみが、村をあらしているものすこいありさまの、現われていることを書ききなさい。

(ニ) 五兵衛の心の清らかさは、どんな言葉で現わしたらよいでしょう。

3 「良寛さま」を読んで、つぎのことを調べましょう。

(イ) 良寛さまの人がらを、この文の中の言葉で現わしてみなさい。

(ロ) 「このさとに、手まりつきつつ子供らとあそぶ春日はくれずともよし」の歌の意味。この歌から、良寛さまのどんな人がらが知られますか。

4 「坂道」を読んで、心の清らかさの現われている点をあげなさい。この文は、六年生の作文です。すぐれたところがわかりますか。

みなさい。

(一) 心を清くする話

1 「アフリカのえいゆう」を読んで、つぎの仕事を書きなさい。

(イ) この物語のすじを短く、まとめなさい。

(ロ) シュバツェルがアフリカ行を思い立つたわけはなんでしょう。

(ハ) シュバツェルが、ふるさとに対して、なごりをおしんでいる言葉を書きなさい。

(ニ) シュバツェルの、心の清らかさの現われているところを、書いてみなさい。

(ホ) 医者がよくつかう言葉を、この文の中から、拾ってごらんください。

2 「いなむらの火」を読んで、つぎのことを研究しましょう。

(イ) 五兵衛は、つなみのくることを、何によって知ったのですか。

(三) わたくしの読書帳から

1 読書するとき、どんなことに気をつけたらよいでしょうか。この文の中には、それがいくつかあげてあります。じゆんに書きなさい。

2 皆さんは、読書帳をつくっていますか。つくっていたら、どんなことを書いていますか。

3 「手であじあう」ということは、なんでしょう。

4 「小公子」を読んだことがありますか。もし、読んだことのない人は、一度読みなさい。そして、みなさんの読んだ、「話のすじ」「感想」と、教科書の文とくらべてみなさい。

「話のすじ」は、きつとにできると思います。「感想」は、人によっていくらかちがうから、教科書の文と同じにならないかも知れません。むりに同じにしないでいいのです。

5 「セドリック」が、がんでかんしゃく持の

おじいさんを、いい人にしたわけはどこにあるのでしょうか。ここがわかかったら、ほんとうに、よく読んだといえましょう。

6 「つばめ」の文を読んで、つぎのことを調べましょう。

(イ) つばめのありさまが、見えるように、じつによくうつつされています。どんなところか、書き取ってみなさい。

(ロ) 「歌をみなくとも、どれだけの歌か、わかった。」と、いったのは、どうしてでしょう。

(ハ) 歌をつくるのに、一ばんたいせつな心がけは、なんででしょう。

7 「犬ころ」の文を読んで、つぎのことを研究してみなさい。

(イ) この文のすじを短くまとめなさい。

(ロ) 作者が、いぬがすきですきでたまらない

みなさんのために書いた有名な話です。おちついて終りまで読み通してみましょう。

2 「天気の話」というのですが、天気についてどんなことを書いているのか、すじをノートに書きましょう。

3 この物語は、八つの小さい単元に分かれていますが、大きく考えて、組みたてが三つに分かれているように思われます。研究してごらんください。

1 ()

2 ()

3 ()

4 このお話を讀んだ感想を、作文にしてごらんください。

5 この話の間に、作者イリインはどんなことを考えさせようと思っているのですか、友だちと討議してみましょう。

ことの、よく現われている言葉を書きだしなさい。

(イ) いぬをよく見ている人でなければ、書けないところがあります。どこでしょう。

8 「がん」の文を読んで、つぎの仕事ノートにしてみなさい。

(イ) 話のすじを書いてごらんください。

(ロ) 残雪とはやぶさとたたかうようすの見えるように、書けている点に気がつきますか。

(ハ) 残雪の勇ましさ、心の美しさなど、鳥ながら感心させられます。わかりますか。

9 「波にさく花」で、書き方の最もすぐれているところはどこでしょう。

10 「五つの文」をくらべてみると、どれにもすぐれた点があります。書いてみなさい。

(四) 天気の話

1 この物語は、エム・イリインという人が、

6 天気と人間とは、どんな関係がありますか。また、自然と人間とはどんなつながりがありますか、友だちと討議しましょう。

7 みなさんは、いままでにどんな本を讀んでいますか。書きだしてみましょう。

本を讀むことは、ごはんを食べると同じように、自分の心をふとらせることです。どんな本を讀む習慣をつけましょう。

8 本をどんなに讀んでいますか。讀みっぱなしにしないで、自分の身につく方法を考えてみましょう。

例えば、読書帳をつくること。讀んだ本について話し合う読書会や発表会を開くこと。読書のためのクラブを作るなど。

(五) 世界を結ぶもの

1 ここには「世界を結ぶもの」として、少年赤十字と国際連合があげてありますが、いっ

たい「世界を結ぶ」というのは、どんなこと
なのでしょうか。また、少年赤十字と国際連
合とは、それぞれどんなことで世界を結んで
いますか。このほかに、まだ、「世界を結ぶ
もの」として、いろいろなものが考えられる
と思います。どんなものがあるか、みんな
話し合ってみましょう。

2 「救われた子供」を読んで、つぎのことを考
えましょう。

(イ) どんなどころに、少年赤十字の世界を結
ぶ活動が現われていますか。

(ロ) また、この活動によって世界が結ばれた
ことが、どこでわかりますか。

3 つぎの言葉の意味を、みんなで話し合いま
しょう。

(イ) — 空がぼくらの わたしらの 心よ心
よ こども赤十字。

6 少年赤十字団員のちかいの言葉で、「世界を
結ぶ」という精神がはっきりでているのは、
どこでしょうか。

7 「国際連合の話」を読んで、つぎのことを調
べましょう。

(イ) 国際連合はいつできたか。

(ロ) 現在の参加国数。また、どんな国であれ
ば参加を許されるか。そのわけ。

(ハ) 総会はどんなことをするか。また、その
権限は、安全保しよう理事会との関係は。

(ニ) 安全保しよう理事会はどんな権限を持っ
ているか。

(ホ) きよ否権とは何か。

(ヘ) 国際連合のめあてはどこにあるか。

(六) 門出

1 「文集」のところを読んで、それぞれの文の
ちがう点を表に書きましよう。

(ロ) — 花がぼくらの わたしらの すがた
よすがたよ こども赤十字。

(ハ) — 旗がぼくらの わたしらの しるし
よしるしよ こども赤十字。

4 なぜでしょうか。

(イ) 少年赤十字の人々が、からだをじょうぶ
にすることを心がけるのは。

(ロ) 外国の団員と、絵や手紙のやりとりをす
るのは。

5 つぎの言葉は、どんなことをいったもので
しょうか。

(イ) 「少年赤十字——これこそこうしたことを
めあてにしている、子供たちの集まりなの
です。」

(ロ) 「少年赤十字——それは、りっぱにさいた
ひとつの花ではありません。一つの種です。
芽です。」

目のつけどころ

○ 作者は男の子か女の子か、または
そのほかの人か。

○ 書かれたことがらはどうか。

○ 書き表わしかたはどうか。

2 書くことから、書き表わしかたはそれぞれ
ちがっても、作者みんなに、同じ心が動いて
いると思われれます。それについて、友だちと
話し合いましよう。

3 みなさんも、思い出や希望を表わした作文
をつづりましよう。そして、文集を作りまし
ょう。その文集を第一号とし、これからも続
けて発行するような相談をしましよう。

みなさんは、六カ年の間に、書くことがど
んなにだいじな仕事であるかを、考えてきた
でしょう。書くことによって、自分の心を育
てていくことができます。さらに、文集

はえ	23	ひっそり	10	ぶな	16	ぼとぼと	74
はかり	100	びつちゆう	41	ぶらく	28	ほねぐみ	77
はきはき	129	ひでり	94	フランクリン	131	ボルガがわ	73
はこね	20	ひとしく	137	ふりしぼる	64	ボルドー	24
ばしょう	20	ひねくりまわす	78	ふるぼける	95	ほんばこ	124
はずませ	132	ひやくらい	36	ふるしきづつみ	129		
はたち	127	ひようご	107	プロペラー	86	まいちもんじ	61
はたはた	23	びようしゃ	28			まがき	23
はなづら	55			へいぜい	130	まきおきる	92
はやがね	35	フェルト	98	ヘルニヤ	29	まきこまれる	5
はんでん	10	ふかぶか	13	へんじん	25	まさる	46
		ぶき	115			ます	105
ひえる	80	ふくぎつ	82	ボーイ	101	ますい	30
ビエール	16	ふくれる	128	ぼうし	107	まなびや	137
ひこうき	71	ふさい	26	ぼうつと	138	まばら	9
ひこうじょう	86	ふさく	94	ほうどう	116	まぶしげ	15
ひさん	29	ふじさん	20	ほうねん	33	まぼろし	14
ひたむき	140	ふたえ	138	ほうりつ	113	マルセーユ	95
ひだまり	95	ぶつつかる	37	ぼこう	123	マント	44
びっしより	5	ふとうめい	71	ぼくどう	7		

ぜんめんてき	115	たそがれ	36	とろけそう	55
せんもん	89	たたずむ	30	どんぶり	59
		たなびく	84		
そうかい	111	たましま	41	なおさら	12
そうげん	7			ながたらしい	8
そうしゅん	123	ちかう	137	なかまいり	100
		ちず	27	なだめる	97
だいいちじ		ちぢかむ	11	なつとく	31
せかいたいせん	108	チャールス	96	なんじ(ら)	38
たいきかんそくじよ	78	ちやくりくじょう	81		
だいきん	89	ちゆうくう	13	にくがん	71
たいし	131	ちゆうねん	24	にわか	10
たいじゆう	100	ちゆうさいたい	75	ねがえり	53
だいぞう	59	ちり	20	ねじろ	28
だいちょう	29	ちんちようげ	14		
タオル	98			のうりよく	120
たかだい	35	つうか	113	のしかかる	36
たき	75	つげる	18	ハイト	87
たくましい	121	つなぎあわす	76		
たぐる	123	つなみ	34		

武 (115)	境 (108)	体 (84)	敵 (63)	衣 (41)	衛 (33)	宣 (24)	河 (4)
協 (120)	総 (111)	属 (87)	折 (72)	仏 (42)	老 (33)	妻 (24)	幹 (9)
慣 (123)	律 (113)	団 (98)	象 (75)	参 (47)	祝 (33)	備 (25)	絹 (9)
堂 (140)	勸 (113)	護 (99)	圧 (76)	舌 (54)	祭 (33)	舎 (28)	旧 (15)
	従 (113)	健 (107)	骨 (77)	争 (68)	退 (37)	薬 (29)	軽 (18)
	否 (114)	康 (107)	複 (82)	昨 (60)	修 (40)	腸 (29)	婦 (24)

漢字

もったいない	もちませ	もくせい	めばえる	めつきり	めじるし	めぐりあわす	めくる	むふうたい	むだばなし	むごん	むくむくした	むくげ	みれん	みずいろ	みぎ	みがく
34	128	14	119	11	122	89	129	66	8	136	54	22	49	97	9	124
リール ブルビル	らんまん	ランパ レーネ	よろめく	ヨール レン	よぎ	よいまつり	よいしょ こらしよ	ゆうよ	やもり	やまもと	やまがら	やなぎ (しだれやなぎ)	ものずき	もどかしい		
27	65	28	63	84	53	33	43	34	45	130	10	121	25	35		
								わりこむ	わたぎれ	レイ モンド	れいとう ぎ	ルー セット	りょう かん	りょう		
								55	7	96	83	16	38	75		

庫
50
660

広島大学図書
0130449660
